

甲府城下町遺跡 31

(丸の内3丁目 110 地点)

—集合住宅建設事業に伴う発掘調査報告書—

2022

株式会社タカラレーベン
甲府市教育委員会
昭和測量株式会社

序

甲府盆地北辺に位置する甲府市は、北側に長野県との県境に聳える標高 2599 m の金峰山それに連なる秩父山地、西方には 3000 m 級の南アルプスの山並み、東南側には御坂山地とその後方に富士山が望め、市域の北西山間部は令和 2 年度日本遺産に認定された特別名勝の御岳昇仙峡などがある、自然豊かな山紫水明の土地です。

甲府の都市としての発展は、永正十六（1519）年に武田信虎が、甲斐国の府中として居館を築いたことにはじまります。16 世紀代の武田氏三代の武田城下町、江戸時代の甲府城下町と、中世と近世の城下町が複合して現在の中心市街地を形成された全国的にも数少ない県庁所在地であり、約 500 年以上山梨県の政治、経済、文化の中心として栄えています。

調査区域であります甲府城下町遺跡は、16 世紀末に豊臣家の五奉行の一人である浅野長政と幸長親子により、東国では数少ない総石垣の甲府城と、三重の堀と土塁に囲まれた城下町が築られました。調査地点近辺は、二の堀の外側ですが「百石町」とよばれ、武家屋敷が建ち並んでいました。

調査では建物跡、大型の埋桶、陶磁器、金属製品など、江戸時代の武家屋敷の出土品と、さらに明治時代以降として第十銀行の倉庫群の遺構も確認されています。

今回の調査成果が、甲府の歴史研究の資料となるとともに、今後のまちづくりの一助としてご活用いただければ幸甚です。

末筆となりましたが、このような貴重な遺跡発掘調査が実施できましたのも、ひとえに関係者のご理解、ご協力の賜物であるとともに、発掘調査及び整理作業に従事された皆様方のご努力の成果であります。ここに感謝申し上げます。今後ともご支援・ご協力をお願い申し上げます。

令和 4 年 6 月

甲府市教育委員会

教育長 數野保秋

例 言

1. 本書は、山梨県甲府市丸の内3丁目110に所在する甲府城下町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は集合住宅建設に伴い、事業者である株式会社タカラレーベンの費用負担により実施した。
3. 発掘調査と整理報告書作成業務は、株式会社タカラレーベン、甲府市教育委員会、昭和測量株式会社で三者協定を締結し、甲府市教育委員会の指導の下、昭和測量株式会社が調査主体となり実施した。

[調査体制]

調査担当者 泉英樹・藤巻浩太郎（以上昭和測量株式会社文化財調査課）

調査顧問 新津健（昭和測量株式会社文化財調査課研究顧問）

発掘従事者 加藤俊哉・齋藤里美・佐野香織・中澤保・渡辺俊夫

整理従事者 今福ともみ・齋藤里美・佐野香織・広瀬ありさ・三木一恵

4. 発掘調査は令和4年2月3日から令和4年2月18日まで行った。整理報告書作成業務は令和4年3月7日から令和4年6月17日まで、昭和測量株式会社文化財調査課事務所内で行った。
5. 本書に関わる遺構写真は藤巻浩太郎が撮影した。遺物写真は、藤巻浩太郎・齋藤里美・佐野香織・広瀬ありさが撮影した。
6. 本書の編集は藤巻浩太郎が行った。執筆分担は以下の通りである。
第1章第1節：志村憲一（甲府市教育委員会）
第5章第1節：森勇一（東海シニア自然大学）・株式会社パレオ・ラボ、第2節：三谷智広、
第3節：バンダリ スダルシャン（以上、株式会社パレオ・ラボ）
その他の執筆は藤巻浩太郎が行った。
7. 本調査における自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託した。
8. 報告書作成にあたり、次の機関から御協力、資料提供を賜った。深く感謝の意を表する。
株式会社パレオ・ラボ、山梨県立博物館
9. 本書に関わる出土遺物および写真・記録図面類は甲府市教育委員会で保管している。

凡 例

1. 本書で使用した地図は国土地理院発行の地形図『甲府』1/25,000、甲府市役所発行の都市計画基本図1/2,500である。
2. 遺構・遺物の挿図縮尺は、各図に表示した。写真図版の縮尺は任意である。
3. 遺構平面図の方位は、各図に表示した。方位記号は方眼北を示している。
4. 遺構平面図のX・Y座標値は、世界測地系の平面直角座標系第Ⅷ系に基づく値である。単位はメートルである。
5. 遺構断面図の数値は、標高（T.P.）を示す。単位はメートルである。
6. 土層・遺物観察表中の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づいた。
7. 遺物番号は出土地点にかかわらず連番で付した。本書における挿図・写真図版・遺物分布図・遺物観察表および本文中の遺物番号はそれぞれ対応している。
8. 本書に掲載した絵図等の資料名および権利者は、原則として各資料に表示した。
9. 遺構平面図における一点鎖線は攪乱である。遺構断面図における破線は推定線である。
10. 遺構挿図・遺物挿図で使用したトーンの凡例は以下の通りである。

石断面  木断面（遺構図） 

本文目次

序	第4章 調査の成果	9
例言		
凡例	第5章 自然科学分析	17
第1章 調査の経過	第1節 甲府城下町遺跡(丸の内3丁目)から 得られた昆虫について	17
第1節 調査に至る経緯	第2節 甲府城下町遺跡(丸の内3丁目)出土の動物遺体	22
第2節 発掘作業の経過	第3節 甲府城下町遺跡(丸の内3丁目)から 出土した大型植物遺体	23
第3節 整理等作業の経過		
第2章 遺跡の位置と環境	第6章 総括	26
第1節 地理的環境	第1節 甲府城下町遺跡(丸の内3丁目)の遺構について	26
第2節 歴史的環境	第2節 甲府城下町遺跡(丸の内3丁目)の砂層について	27
第3章 調査の方法と層序		
第1節 調査の方法		
第2節 基本層序		

挿図目次

第1図 本調査地点と既往の調査地点	第9図 嘉永2年(1849)頃の土地利用	26
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	第10図 明治4年(1872)頃の土地利用	26
第3図 基本層序(調査区西・北壁)	第11図 大正9年(1920)頃の土地利用	26
第4図 調査地点全体図	第12図 昭和16年(1941)頃の土地利用	26
第5図 遺構図(1)	第13図 大正時代の土地利用	26
第6図 遺構図(2)	第14図 大正9年の若尾倉庫外観	27
第7図 出土遺物(1)	第15図 明治43年(1910)の被害地域推定	27
第8図 出土遺物(2)	第16図 明治43年(1910)の泉町浸水の様子	27

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	第2表 遺物観察表(磁器・陶器・金属・桶)	16
-------------	-----------------------	----

写真図版目次

図版1 調査地点全景 他	図版5 遺物(1)
図版2 SK1・2	図版6 桶(1)
図版3 SK3・4・5	図版7 桶(2)
図版4 SK6 他	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過

集合住宅建設工事に伴い、令和3年9月13日付けで株式会社タカラレーベン代表島田和一から文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘届出が山梨県知事宛に提出された。それに対して山梨県知事から、令和3年9月29日付け文化第2565号で周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知に基づき、試掘・確認調査を実施することとなった。

調査対象地は、農林水産省山梨食糧事務所の跡地であり1512.08㎡の面積がある。甲府城下町遺跡の南西側に位置し、近世は「百石町」とよばれる武家屋敷地であり、近代は第十銀行の土蔵造りの倉庫群が建ち並んでいた。周辺の調査では、中世から近世、さらに古墳時代及び平安時代の遺構・遺物が検出されている。

試掘調査は、令和3年10月6日に甲府市教育委員会歴史文化財課が実施した。調査は幅1m、長さ4mのトレンチを9本設定し重機で掘削後、人力で遺構・遺物の確認作業が行われた。

その結果、敷地北東隅部に設定したトレンチの地表下約1.5m地点から、直径0.9mの木桶と近世から近代にかけての陶磁器が検出された。調査結果について事業者と協議を行い、木桶が検出された周辺の東西5m、南北4mの範囲約20㎡を本調査の対象地とした。なお、それ以外の調査地点は、山梨食糧管理事務所の鉄筋二階建の建設及び解体により地山層まで攪乱を受け遺構・遺物が確認されなかったため、本調査対象外とした。

本調査に関しては、令和3年12月23日付けで、事業主体者である株式会社タカラレーベンと昭和測量株式会社で発掘調査及整理作業に関する契約書を締結するとともに、前二者と甲府市教育委員会を含めて、令和4年1月13日付けで埋蔵文化財に関する協定書を締結した。その後、調査機関である昭和測量株式会社から、令和3年1月12日付けで埋蔵文化財に関する届出（92条）が提出され、令和3年1月21日付けで山梨県知事から文化第3962号で通知が出され本調査を実施した。

第2節 発掘作業の経過

発掘調査は令和4年2月3日から2月18日の期間で実施した。準備工を含む調査概略は以下の通りである。

調査日誌抄録

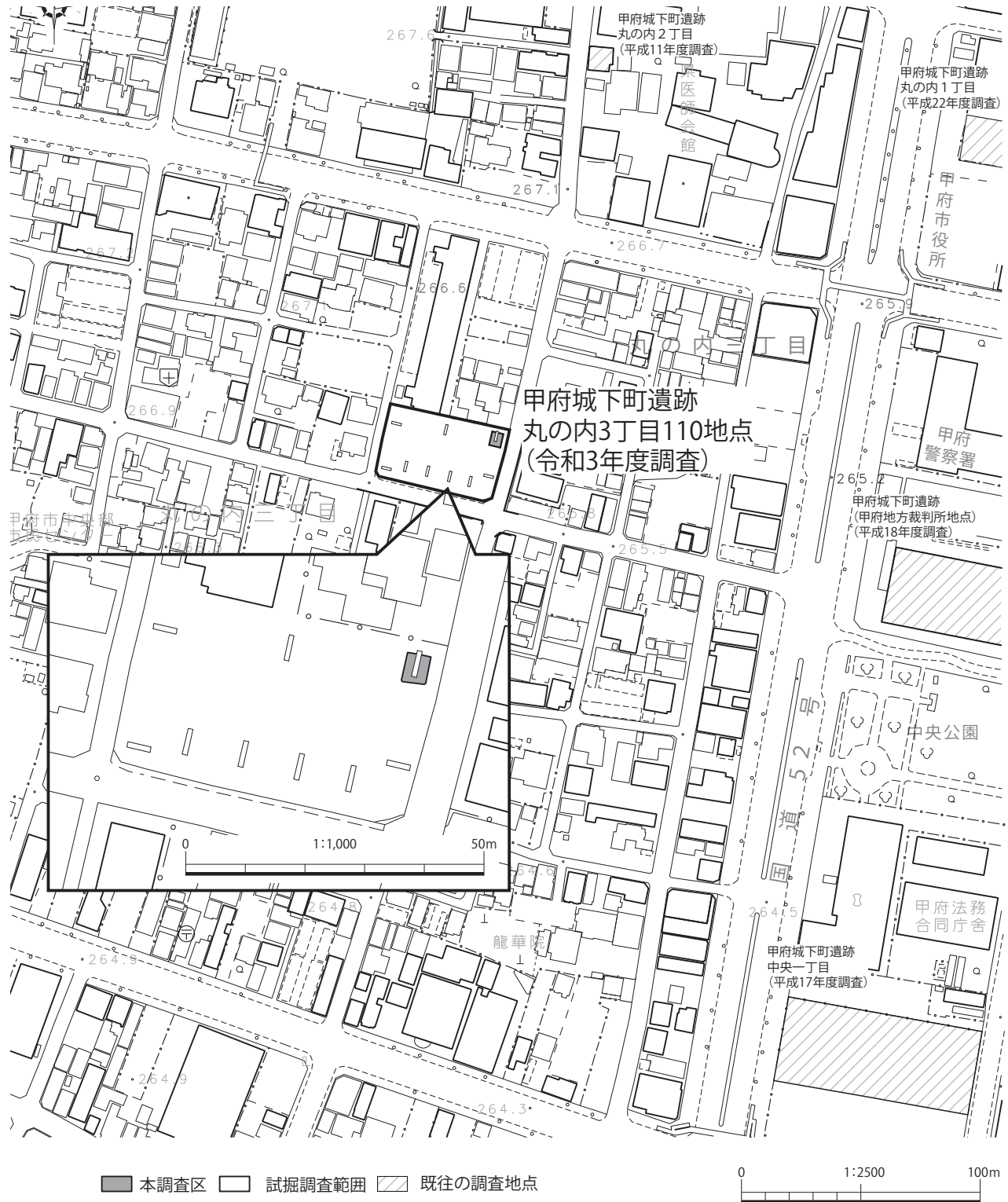
令和4年

- 1月29日（土）準備工（基準点測量・調査区設定）。
- 2月3日（木）重機による表土掘削。試掘調査で検出された井戸（埋桶）を確認。
- 2月4日（金）遺構確認面まで掘削。新たに2基の埋桶を確認。
- 2月7日（月）遺構検出状況撮影。遺構半截作業を開始。
- 2月8日（火）遺構断面図記録。遺構完掘作業開始。
- 2月9日（水）遺構掘削、完掘状況撮影。
- 2月10日（木）荒天により現場作業中止。基礎整理作業を行う。
- 2月12日（土）雨水の排水・現場復旧作業。遺構計測及び遺物取上を行う。新たに1基の埋桶を確認。
- 2月14日（月）雨水の排水・現場復旧作業。調査区壁面撮影、実測作業。
- 2月15日（火）雨水の排水・現場復旧作業。遺構掘削、記録を完了し完掘状況を撮影。
- 2月16日（水）雨水の排水。埋桶掘方の補完作業。下層確認のため地山から60cm掘削。
- 2月17日（木）雨水の排水。全体測量
- 2月18日（金）仮設トイレ・重機の搬出を行い、当日中に調査区からの撤収を完了した。

第3節 整理等作業の経過

整理・報告書刊行業務は、令和4年3月7日から令和4年6月17日の間、山梨県笛吹市石和町に所在する昭和測量株式会社文化財調査課の事務所内にて行った。

整理作業は遺物の水洗・注記から開始した。遺物の接合、土壌水洗・選別作業と進め、実測とトレース、写真撮影などの記録作業を行った。種実同定・昆虫同定などの自然科学分析については株式会社パレオ・ラボに委託した。現場の調査写真や遺構図面についても順次整理作業を行い、遺物観察表の作成、報告書の挿図・図版の編集、本文執筆と作業を進め、令和4年6月30日に報告書を刊行した。



第1図 本調査区と既往の調査地点

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

甲府城下町遺跡は、16世紀末から17世紀初頭に造営された近世城下町である。甲府盆地北縁部に位置し、北方の山地から流れる相川が形成した扇状地の扇端部にあたる。西側に相川、南側に荒川、北東側に愛宕山（標高423 m）の縁辺部を東へ走る藤川が流れ、それらの河川に囲まれた範囲に立地する。愛宕山から南西方向の一条小山（標高304 m）の地には甲府城が築かれた。甲府城下町は、この甲府城を中心として一の堀（内堀）・二の堀・三の堀と、三重の堀を巡らせた城下町である。二の堀の内側は武家地、その外側は町人地が形成された。

調査地点は、甲府城下町遺跡の南西部に位置し、二の堀外側の百石町に該当する場所である。調査地点の北側約200 mの地点には二の堀の一部が現在も残る。

甲府城下町遺跡全体は、概ね標高260～300 mの扇状地斜面に立地する。今回の調査地点の現況地盤の標高は266.9～267.1 mであり、比較的低い場所に立地している。

第2節 歴史的環境（第2図）

旧石器時代

周辺では、居住地とみられる遺跡は知られていない。八幡神社遺跡（42）ではナイフ形石器や切出形石器など4点の石器が見つかったが、石器のみで剥片は無く、居住地とは考えられていない。他に、緑が丘スポーツ公園東側の相川の河床でナウマンゾウの臼歯の化石が発見されている。出土した地層から8万年前のものと推定されており、当時の環境の一端を窺い知ることができる。

縄文時代

散布地と位置付けられる遺跡がほとんどであるが、甲府城下町遺跡から荒川を挟んで南西方向には上石田遺跡（77）が所在する。甲府盆地の底部という立地で初めて報告された縄文集落で、竪穴建物2軒、石囲い土坑1基などを検出している。主に中期後半の遺物が出土した。八幡神社遺跡では、主に中期中葉から後葉の土器や土偶が出土した他、黒曜石を主体とする石器や剥片が大量に出土しており、石器製作跡と位置付けられている。集落遺跡としては他に朝気遺跡（98）などがある。

弥生時代

前期の遺跡は確認されていない。周辺で最も古い段階の遺跡は、幸町A遺跡（91）で、中期後半の土器が出土している。後期以降では遺跡数が増加し、古墳時代や平安時代まで継続する複合遺跡も多い。

古墳時代

甲府城下町遺跡の北西に位置する緑が丘二丁目遺跡（39）、塩部遺跡（52）、南東に位置する朝気遺跡（98）などが代表的な集落遺跡である。緑が丘二丁目遺跡（2017年度調査）では、弥生後期末から平安の竪穴建物を合わせて14軒、掘立柱建物を3軒検出している。中には排水溝を持つ竪穴建物（古墳後期）やカマドをもつ平地式建物（奈良）なども報告されている。塩部遺跡も弥生後期から平安まで継続する集落遺跡である。複数地点で発掘調査が実施されており、これまでに報告された竪穴建物・掘立柱建物などの建物の総数は148軒にのぼる。甲府工業高校地点では4世紀後半とされる方形周溝墓の周溝からウマの歯が出土した他、駿台甲府学園地点では古墳時代後期の流路から織機の部材と推定される木製品をはじめとして多数の木製品が出土している。朝気遺跡でも複数地点で調査が行われており、弥生時代末から平安時代の建物の他、弥生時代末の土器棺墓、古墳時代の方形周溝墓、平安時代の伸展葬人骨を伴う土坑墓なども検出している。これらの遺跡から想定される当時の環境は、活況を呈しており、甲府



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近世	城下町	30	湯村山城跡	中世	城館跡	59	南善光B遺跡	古墳～平安	散布地	88	湯田一丁目遺跡	古墳	散布地
2	甲府城跡	近世	城館跡	31	湯村山6号古墳	古墳	古墳	60	地藏北遺跡	古墳～平安	散布地	89	伊勢町遺跡	古墳	包蔵地
3	武田城下町	中世	城下町	32	湯村山5号古墳	古墳	古墳	61	亥ノ兎遺跡	平安～	散布地	90	食糧工場遺跡	縄文・弥生	包蔵地
4	武田氏館跡	中世	城館跡	33	湯村山4号古墳	古墳	古墳	62	大六天遺跡	平安～	散布地	91	寺町A遺跡	弥生	包蔵地
5	西前田A遺跡	中・近世	散布地	34	湯村山3号古墳	古墳	古墳	63	宮裏遺跡	平安～	散布地	92	幸町B遺跡	古墳	散布地
6	西前田B遺跡		散布地	35	湯村山2号古墳	古墳	古墳	64	宮の脇A遺跡	縄文・平安～	散布地	93	南口A遺跡	平安	散布地
7	不動遺跡	近世～	散布地	36	湯村山1号古墳	古墳	古墳	65	宮の脇B遺跡	縄文・平安～	散布地	94	南口B遺跡	平安	散布地
8	日影遺跡		散布地	37	万寿森古墳	古墳	古墳	66	御崎田遺跡	平安	散布地	95	木俣遺跡	近世	散布地
9	御馬屋小路A遺跡	中世	散布地	38	和田無名墳	古墳	古墳	67	銀杏の木	平安～	散布地	96	般舟院跡	中世	寺院跡
10	御馬屋小路B遺跡		散布地	39	緑が丘二丁目遺跡	縄文～平安	集落跡	68	東光寺遺跡	平安～	散布地	97	住吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
11	土屋氏館跡	中世	城館跡	40	緑が丘一丁目遺跡	古墳	集落跡	69	宮の前遺跡	縄文	散布地	98	朝気遺跡	縄文～平安	集落跡
12	十二天遺跡	平安	散布地	41	山梨大学遺跡	奈良・平安	包蔵地	70	上郷遺跡	平安～	散布地	99	里吉天神遺跡	古墳～平安	散布地
13	永井遺跡	古墳・平安	散布地	42	八幡神社遺跡	縄文	散布地	71	本郷遺跡	縄文・古墳～	包蔵地	100	家之前遺跡	平安	散布地
14	お塚さん古墳	古墳・平安	古墳	43	コツ塚古墳	古墳	古墳	72	本郷B遺跡	平安～	散布地	101	中坪遺跡	古墳	散布地
15	三光寺山遺跡	古墳・平安	古墳	44	一ツ塚古墳	古墳	古墳	73	本郷C遺跡	古墳～中世	散布地	102	十丁遺跡	古墳	散布地
16	藤澤ヶ崎亭跡	中世	城館跡	45	二ツ塚1号墳	古墳	古墳	74	宝町遺跡	縄文・平安	散布地	103	十丁B遺跡	古墳	散布地
17	峰本南A遺跡	近世	寺院跡	46	二ツ塚2号墳	古墳	古墳	75	寿町遺跡	古墳～	散布地	104	字前A遺跡	古墳	散布地
18	峰本南B遺跡	近世	散布地	47	二ツ塚3号墳	古墳	古墳	76	上石田B遺跡	平安	散布地	105	字前B遺跡	古墳	散布地
19	村之内遺跡	古墳～平安	散布地	48	善光寺塚1号墳	古墳	古墳	77	上石田遺跡	縄文	集落跡	106	字前C遺跡	古墳	散布地
20	向田A遺跡	弥生～古墳	散布地	49	善光寺塚2号墳	古墳	古墳	78	上河原遺跡	平安～	散布地	107	村之内遺跡	古墳～平安	散布地
21	向田B遺跡		散布地	50	北原無名1号墳	古墳	古墳	79	沢沢遺跡	平安～	散布地	108	青葉町遺跡	平安	散布地
22	長閑遺跡	中世	包蔵地	51	富士見遺跡	古墳・平安	散布地	80	久保北河原遺跡	平安	散布地	109	北桜遺跡	平安	散布地
23	大手下遺跡	縄文	散布地	52	塩部遺跡	弥生～平安	集落跡	81	大北河原遺跡	平安	散布地	110	野村遺跡	古墳～平安	散布地
24	永慶寺跡	近世	寺院跡	53	新紺屋小学校遺跡	近世	散布地	82	宮北遺跡	縄文・平安	散布地	111	油田遺跡	平安	散布地
25	岩窪C遺跡	古墳	散布地	54	大笠山水の元遺跡	古墳～平安	散布地	83	秋山氏館跡	中世	城館跡	112	尾村遺跡	近世	散布地
26	中道東遺跡	近世	散布地	55	堤下A遺跡	平安～	散布地	84	千松院遺跡	中世～	散布地	113	洲之上遺跡	古墳	散布地
27	中道西遺跡	古墳	散布地	56	堤下B遺跡	平安～	散布地	85	太田町遺跡	古墳～	散布地	114	二又遺跡	古墳	包蔵地
28	岩窪遺跡	奈良～中世	包蔵地	57	北原遺跡	縄文・平安	集落跡	86	青沼遺跡	古墳	包蔵地	115	外河原デケヤ遺跡	古墳～平安	散布地
29	茶堂神火台	中世	城館跡	58	善光寺裏遺跡	縄文～平安	散布地	87	青沼三丁目遺跡	中世～	散布地				

第2図および第1表は、甲府市教育委員会発行の『甲府市遺跡地図』（平成4年）をもとに、現在までに範囲等の情報が更新された遺跡については、更新後の情報を反映し作成した。

城下町遺跡内では近世以前の遺構の検出例は少ないが、城下町の範囲内にも各時代の生活域が広がっていた状況が想定できる。

古墳としては、甲府盆地北側の湯村山山麓に湯村山古墳群（31～36）、万寿森古墳（37）が位置している。

奈良・平安時代では、周辺は『和名類聚抄』にみえる巨麻郡9郷のうち、青沼郷に属すると推定される地域である。天平勝宝3年（751）以前に貢進されたとされる正倉院宝物の布に「巨麻郡青沼郷」の墨書銘があり、8世紀の中頃には、青沼郷が成立していたとみられる。上述した緑が丘二丁目遺跡や塩部遺跡、朝気遺跡などでも平安時代の遺構が検出されている。特に朝気遺跡は青沼郷の中心地とも推定されており、第4・5次調査では、古墳時代後期から平安時代の竪穴建物・シガラミ状遺構、古墳時代前期の大溝、弥生時代末の合わせ口甕棺、平安時代の伸展葬人骨がみつかり、大溝からは人形・田舟・石製巡方・緑釉陶器なども出土している。

中世

後に甲府城が築城される一条小山（2）には、平安時代末に武田信義の嫡男である一条忠頼が居館を置いた。一条小山の名称はこれに由来する。寿永3年（1184）、忠頼は源頼朝に謀殺され、その弔いのため忠頼夫人によって尼寺が建立されたが、正和元年（1312）には一条時信によって時宗寺院に改められ、稲久山一条道場一蓮寺となった。一蓮寺はその後、武田信虎の一条小山への砦の普請に伴って小山原の地に移されたとされている。武田城下町遺跡（3）は、武田信虎が永正16年（1519）に甲府市東部に位置する川田館から、躑躅ヶ崎（現在の武田神社付近）へ居館を移したことにより開かれた城下町である。躑躅ヶ崎館の北には詰城の要害城、西に枝城の湯村山城などを築き、周囲の丘陵に烽火台が設置され要塞化が図られた。館の南側に開かれた城下町には、館の主郭部を軸として2町（約218m）間隔に設定した5本の南北基幹街路とこれに交差する東西街路が整備され、基幹街路には敵の進入に備えたクランクが設けられた。武田城下町の南辺は近世の甲府城下町と重なっている。その他の遺跡では、緑が丘二丁目遺跡（1993年度調査）で、屈葬の

人骨が出土した。中世の土坑墓と推定され、北に位置する法泉寺に係する墓地の可能性がある。法泉寺は武田信武が月舟禅師を招いて創建した寺院である。後には武田信玄が甲府五山の一つに定めたとされ、武田勝頼の菩提寺ともなった。秋山氏館跡（83）からは土坑墓 23 基、茶毘状遺構 2 基、建物跡、井戸跡、区画溝が検出された。中世には墓域、近世に至って秋山氏の屋敷となったと推定されている。秋山氏は中世から続く郷士で、江戸時代には村役人を務めた。

近世

天正 10 年（1582）の武田氏滅亡後の甲斐は、織田信長家臣河尻秀隆による支配となったが、まもなく本能寺で信長が倒れ、徳川家康家臣平岩親吉の支配となる。家康は甲府城の築城に着手するが、関東移封によって、今度は豊臣秀吉の家臣たちによる支配となる。甲府城の築城も関東の徳川家を牽制する拠点として、加藤光泰、浅野長政・幸長父子といった豊臣家の家臣に引き継がれ、浅野長政・幸長父子の頃（1600 年頃）に一応の完成に至ったようである。関ヶ原の戦いの以後、甲斐は再び徳川家の支配となった。徳川家一門の城主や幕府直轄による支配が続いた後、宝永元年（1704）からの 20 年間は、柳沢吉保とその子吉里が甲府藩主となって、甲府城の改修や城下町の再整備が行われた。柳沢氏は多数の家臣とその家族を引き連れ、移転してきたため、郭外にも武家地が拡張され、城下町整備の一大画期となった。柳沢吉里の大和郡山への転封以後は、幕末まで幕府直轄領として甲府勤番による支配となった。甲府城下町遺跡（1）は、一条小山に総石垣の平山城として整備された甲府城（2）の周囲に、内堀・二の堀・三の堀と、三重の堀を巡らせた城下町である。二の堀の内側は武家地、その外側は町人地とされた。調査地点の在する百石町は二の堀の郭外であるが、武家地となっていた。『楽只堂年録 第 175 巻』寛永二年（1625）では侍屋敷となっており、『甲州吉里領地時城図』では調査地点に「西田・（里田か）」の記載がある。『甲府府中城図』（江戸中期～末期）では御屋敷と表記され、『甲府御城下絵図』では居住者の名前が記載されているが判別できない。また、城下町の整備にあたって甲府上水が敷設されている。甲府上水は山宮で荒川から取水し、湯川を通して相川へ落とし、相川大口から用水堰を用いて城下まで水を通したものであった。調査地点付近では町用水を田町分口から引き入れていた。

近代

慶応 4（明治元）年（1868）3 月に板垣退助率いる官軍により甲府城は開城した。この際、甲府城代格佐藤駿河守へ城中詰め勤番士の立ち退きが命じられたが、与力同心にまで立ち退きを申し渡され郭内外は大混乱に陥った。6 月に「甲斐鎮撫府」が置かれ、11 月に甲斐鎮撫府が「甲斐府」、明治 2 年（1869）7 月に「甲府県」となり、明治 4 年（1871）11 月に「山梨県」と改められる。明治 6 年（1873）に県令となった藤村紫朗の施策により、甲府城は内城のみを残し、二の堀、三の堀を埋め立てられ市街地化された。武家地であった百石町周辺は民用地の表記が無くなり地割のみの表記となる。その後、内城は明治政府の施策であった殖産興業の一端を担う場として勸業試験場が設置され、農業試験場の他、葡萄酒醸造所が建設されている。明治 30 年（1897）に鉄道建設のため清水曲輪が鉄道院に割譲され、明治 36 年（1903）には鉄道の開通と甲府停車場（甲府駅）の設置に伴って、屋形曲輪、清水曲輪が解体された。これにより、甲府城下町は南北に分断され、その後の市街地形成に大きな影響を与えた。明治 37 年（1904）に甲府城は舞鶴城公園として公園整備される。百石町では明治 35 年（1902）頃若尾銀行倉庫が設立されている。昭和 3 年（1928）には第十銀行（後の山梨中央銀行）・昭和銀行によって若尾銀行が分割買収され、若尾倉庫もまた第十銀行に引き継がれた。その後、昭和 30 年代まで堀の埋め立てや石垣の解体が行われ、城下町は次第に市街地へと姿を変えていくこととなる。

第3章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

調査地点は近年まで「農林水産省 関東農政局 山梨農政事務所」が敷地中央から北側に位置していた。昭和20年の空襲以前では第十銀行の土蔵造り倉庫群が立ち並び、区画の外周には現在でも高さ約1mの石積みが見られる。試掘調査では地表下1.5m地点で桶の検出があり、2mを超える掘削が予想されたため、重機による表土掘削は調査区全体で現地表下約1m地点まで行った後、法面と小段を設定した上で掘り下げた。

調査区は東西4m、南北5mで、調査期間中は調査区への侵入・転落等予防としてカラーコーン・コーンバー・夜間警告灯による囲いを設けた。そのほか、遺構掘削など各工程で市教育委員会担当者による確認と打ち合わせを行った。各地点の遺構検出状況は写真や概略図などで記録した。遺構測量は、土層断面は手描き実測にて行い、平面図はトータルステーションによる測量と写真測量を併用した。写真測量は主にポール撮影で行った。測量図化システムとしてCUBIC社「遺構くん」、写真測量にはAgisoft社「PhotoScan Professional」を用いた。各地点の完掘時には完掘状況の全体写真撮影と合わせてポール写真撮影を行い、「PhotoScan Professional」を用いて地点ごとのオルソモザイク写真を作成した。遺物は原則的にトータルステーションを使用して位置を記録して取り上げた。小片については、遺構出土のものは遺構でまとめ、遺構外出土遺物については層位毎にまとめて取り上げた。遺構写真撮影にはデジタル一眼レフカメラ（Nikon D7200）を使用した。調査終了時には甲府市教育委員会の確認を受けた。

整理作業で写真撮影はデジタル一眼レフカメラ（Nikon D7500）を用いた。遺物実測は手描きで行い、染付などの図化については手描き実測図のトレースデータに補正した写真データを合成した。デジタルトレース、写真データの補正、挿図・写真図版作成、報告書編集作業にはadobe社製「illustratorCC」、「PhotoshopCC」、「InDesignCC」をそれぞれ使用した。

第2節 基本層序

調査区の現地表面は周囲の道路面から造成によって周囲より1m程度高くなっている。最終的な遺構検出面とした地山上面の標高は265.44m～265.21mを測る。北から南へ向かって緩やかに低くなる地形である。

基本層序は調査地点の西・北壁面で観察した。攪乱などを除き、一定の範囲で連続する土層を捉えて基本層序を記録した。表土と近・現代とみられる土層はⅠ層、近世から近代とみられる土層をⅡ層、近世とみられる土層をⅢ層、地山はⅣ層とし、必要に応じて小文字のアルファベットを付して細分した。

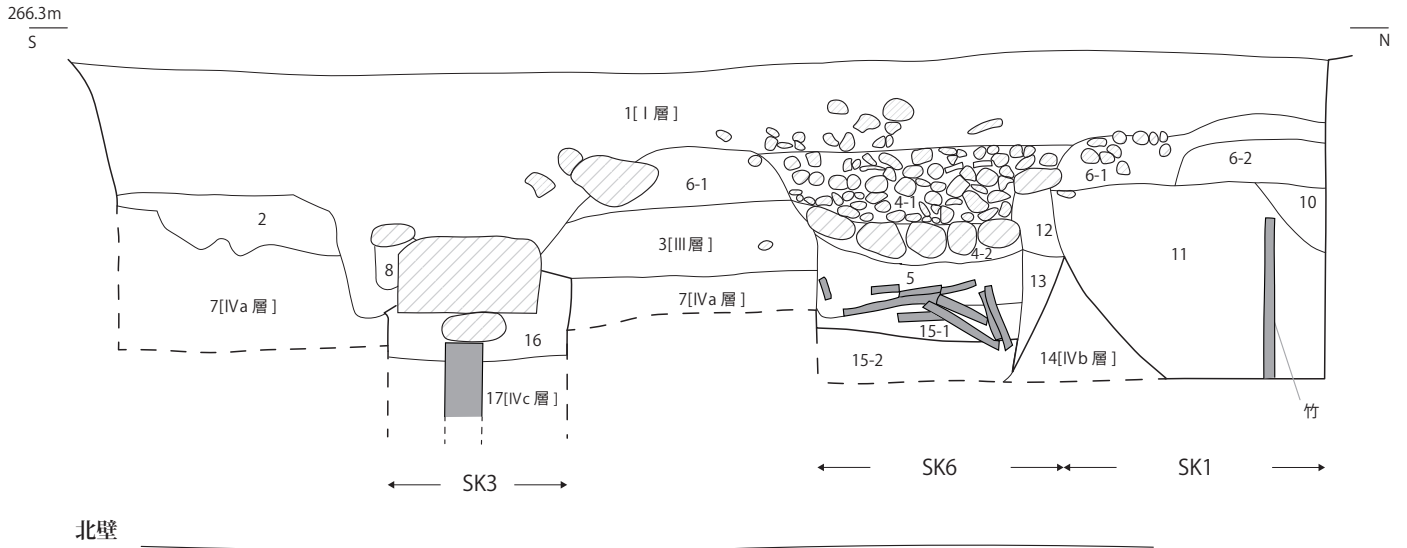
Ⅰ層は石・粗粒砂からなる層である。直上の攪乱層に比べ砂の割合が高く、暗灰黄色砂を基調とする。水平になるよう堆積しており、造成層と推測される。

Ⅱ層は粗粒砂・細粒砂からなる砂層である。層の厚さは18～30cm程度で三層あり、暗オリーブ褐色砂を基調とするⅡa層や暗灰黄色砂を基調とするⅡb層、Ⅱc層がほぼ水平に堆積する。層との境には酸化した砂層が帯状に堆積しているため、洪水に伴うものと推測される。発掘調査ではこのⅠ・Ⅱ層を重機による表土掘削の対象とした。

Ⅲ層は地山直上付近に堆積する土層である。層の厚さは20cm程度であり、黒褐色粘土を基調とする。出土遺物から江戸後期～明治初頭の堆積とみられる。

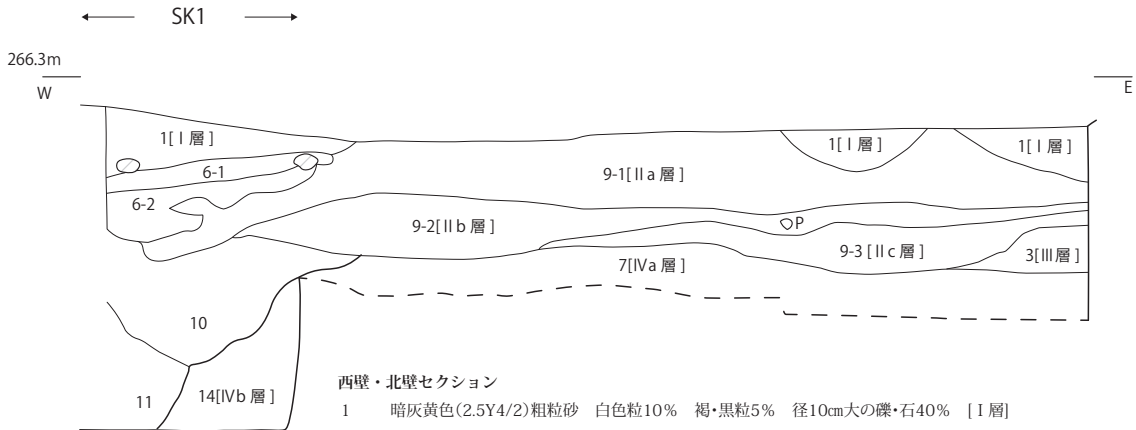
Ⅳ層は自然堆積層である。黒褐色粘土を基調としている。最終的な遺構検出は地山であるⅣ層（Ⅳa）で行った。

攪乱



北壁

攪乱



西壁・北壁セクション

- 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂 白色粒10% 褐・黒粒5% 径10cm大の礫・石40% [I層]
- 2 黒褐色(2.5Y3/2)粘土 赤・白色粒5% 表面がとても脆い 締まりゆるい
- 3 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 白色粒3% IVa層との間に酸化粘土を帯状に含む 黒褐色(2.5Y3/2)粘土が斑りに混じる [III層]
- 4-1 黒褐色(2.5Y3/2)礫 白色粒10% 瓦・径10cm大の礫・石40%
- 4-2 黒褐色(2.5Y3/2)シルト 白色粒径1mm10% 締まりゆるい
- 5 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 白色粒5% 黒色粒5% 腐敗植物の塊含む
- 6-1 黒褐色(2.5Y3/2)粘土 赤色粒5% 酸化土30% 黒色(10YR2/1)粘土ブロック10% とても良く締まる
- 6-2 黒色(2.5Y2/1)粘土 暗灰黄(2.5Y5/2)細粒砂を斑りに混じる
- 7 黒褐色(10YR2/2)粘土 10cm間隔で酸化粘土を帯状に含む [IVa層]
- 8 黒褐色(2.5Y3/1)シルト 白色粒10% 黒褐色細粒砂10%
- 9-1 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粗粒砂 白色粒5% 黒色粒5% 黄色粒1% IIb層との間に酸化砂を帯状に含む [IIa層]
- 9-2 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂 暗灰黄色細粒砂30% 白色粒5% 黒色粒5% IIc層との間に酸化砂を帯状に含む [IIb層]
- 9-3 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗粒砂 礫5% III・IVa層との間に酸化砂を帯状に含む [IIc層]
- 10 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 黄色粘土混じる 黄灰色砂混じる
- 11 黒褐色(10YR3/1)粘土
- 12 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 暗灰黄色細粒砂が少量混じる
- 13 黒色(2.5Y2/1)粘土 黒色細粒砂含む
- 14 黒色(5Y2/1)粘土 一部青白く変色 締まりゆるい [IVb層]
- 15-1 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 締まりゆるい
- 15-2 黒褐色(5Y3/1)粘土 石混じる 一部青白く変色
- 16 灰色(5Y4/1)粘土 締まりゆるい 黄灰色(2.5Y4/1)粘土少量含む
- 17 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土 黒褐色(2.5Y3/1)粘土5%含む [IV層(IVc層)]



第3図 基本層序(調査区西・北壁)

第4章 調査の成果

調査地点は甲府城西側、二の堀外側の百石町の小路に面する武家地に位置し、現在では平和通りの西側に位置する。現況は農林水産省関東農政局山梨農政事務所の跡地となっており、周囲の道路面から造成により1m程度高くなり、道路に面した三方は石積みが行われている。調査区東側はコンクリート、碎石等によって攪乱されている。

現地表面から1.2mで埋桶を2基、建物基礎遺構（礎石）を1基検出した。更に50cm掘削し地山上面で破損した桶1基、打設された杭を含む建物基礎遺構2基を検出した。調査地点全体では、埋桶3基、建物基礎遺構3基である（第4図）。出土遺物の総量はプラスチックコンテナ（59×38×20cm）2箱に相当する。

S K 1（埋桶）（第5図、図版2）

〔位置・重複〕 調査地点の北西側に位置する。切り合いではS K 6より新しく、S K 2と掘方を重複するが重複関係は不明である。

〔形状・規模〕 平面形は円形で、桶は長径1m、短径87cm、深さ54cmを測る。掘方の断面形は、底面は平坦で桶に沿って筒状に立ち上がり、上面付近は大きく広がっている。

〔検出状況・埋土〕 地山上面で検出した。埋土は桶上部では暗灰黄色粗粒砂を基調とし、下部では黒褐色細粒砂を基調とする。桶底部は黒褐色細粒砂が堆積している。桶底部に堆積した砂層は水分を多く含み、腐敗した植物や種子が多量に検出された。埋土から検出された種子、植物、骨、昆虫は自然科学分析を行った。桶は側板の3/4と底板が遺存しており底径は75cmを測る。側板の外側に竹筒が対角線上に2本確認された。

〔出土遺物〕（第7図・図版5）磁器・陶器・金属製品が出土しており、そのうち10点を図示した。1～7は磁器である。1は型紙摺りの平碗、2は半筒形の鉢、3・4は半筒形の蓋物で3は銅板転写である。5は高台脇重ねの段重、6は辣韭形の瓶で色具合から明治に下る可能性がある。7は瓶である。8・9は陶器である。8は土瓶、9は瓶である。10は金属製の煙管である。

〔時期〕 検出状況や出土遺物から埋桶の使用時期は江戸後期にさかのぼる可能性はあるが、廃絶時期は明治期とみられる。

S K 2（埋桶）（第5図、図版2）

〔位置・重複〕 調査地点中央南側に位置し、掘方の北側は調査区外へ延びる。切り合いでは、S K 1と掘方を重複する。

〔形状・規模〕 平面形は円形で、長径1.1m、短径93cm、深さ64cmを測る。掘方の断面形は、底面は平坦で桶に沿って筒状に立ち上がり、上面付近は大きく広がっている。

〔検出状況・埋土〕 地山上面で検出した。埋土は黒褐色粘土を基調とし、桶上部に暗灰黄色粗粒砂が堆積している。桶底部は黒褐色細粒砂が堆積している。埋土から検出された種子、昆虫は自然科学分析を行った。桶は側板の下位と底板が遺存しており底径は72cmを測る。S K 1と同様、側板の外側に竹筒が対角線上に2本確認された。

〔出土遺物〕（第7図・図版5）磁器・陶器が出土しており、そのうち5点を図示した。11～14は磁器である。11・12は丸碗、13は瓶、14は折縁形の中皿で型紙摺りであり、手描も加える。覆土上層から出土し、明治後半とみられる。15は陶器で蓋物である。

〔時期〕 検出状況や出土遺物から埋桶の使用時期は江戸後半とみられる可能性はあるが、廃絶時期は明治期とみられる。

S K 3（建物基礎）（第6図、図版3）

[位置・重複] 調査地点の南西部に位置する。

[形状・規模] 調査区外に延びるため、平面形の全容は不明だが楕円形を呈するとみられる。長径 51cm、短径 57cm、深さ 15cmを測る。

[検出状況] 地山上面で検出した。長辺 57cm、短辺 51cm、最大厚 30cmの方形礎石を径 10～15cmの礫と灰色粘土で根固めし、礎石直下には礎石を支える径 15cmの丸杭が 3 本打設されている。建物基礎とみられる。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。遺構の時期は I 層直下で検出されたため、近代の可能性はある。

S K 4 (杭) (第 6 図、図版 3)

[位置・重複] 調査地点東半部北側に位置する。重複する遺構はないが東部は攪乱されている。

[形状・規模] 平面形は不整形で長径 1.1 m、短径 96cm、深さ 32cmを測る。掘方の断面形は扁平な皿状である。

[検出状況] 地山上面で S K 3 から攪乱へと直線状に攪拌された埋土を掘削し、杭とみられる遺構を検出した。埋土に径 15cmの石を複数含むが杭から離れた位置で検出された。径 10～12cmの丸杭が 3 本打設されているため礎石下の杭とみられる。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。遺構の時期は S K 3 と同様に近代の可能性はある。

S K 5 (杭) (第 6 図、図版 3)

[位置・重複] 調査地点東端部に位置する。

[形状・規模] 地山上面で検出した。検出部分では長径 44cm、短径 39cm、深さ 5cmを測り、掘方はほとんど検出されなかった。

[検出状況] 地山上面で検出した。埋土に石は無く、径 15cmの丸杭が 3 本打設されているため礎石下の杭とみられる。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。S K 4 と 1 間の間隔があるが深度に違いがみられる。遺構の時期は近代の可能性はある。

S K 6 (埋桶・廃棄土坑) (第 5 図、図版 4)

[位置・重複] 調査地点西部に位置する。平面での切り合いは不明だが、西壁の土層断面では S K 1 に先行する。

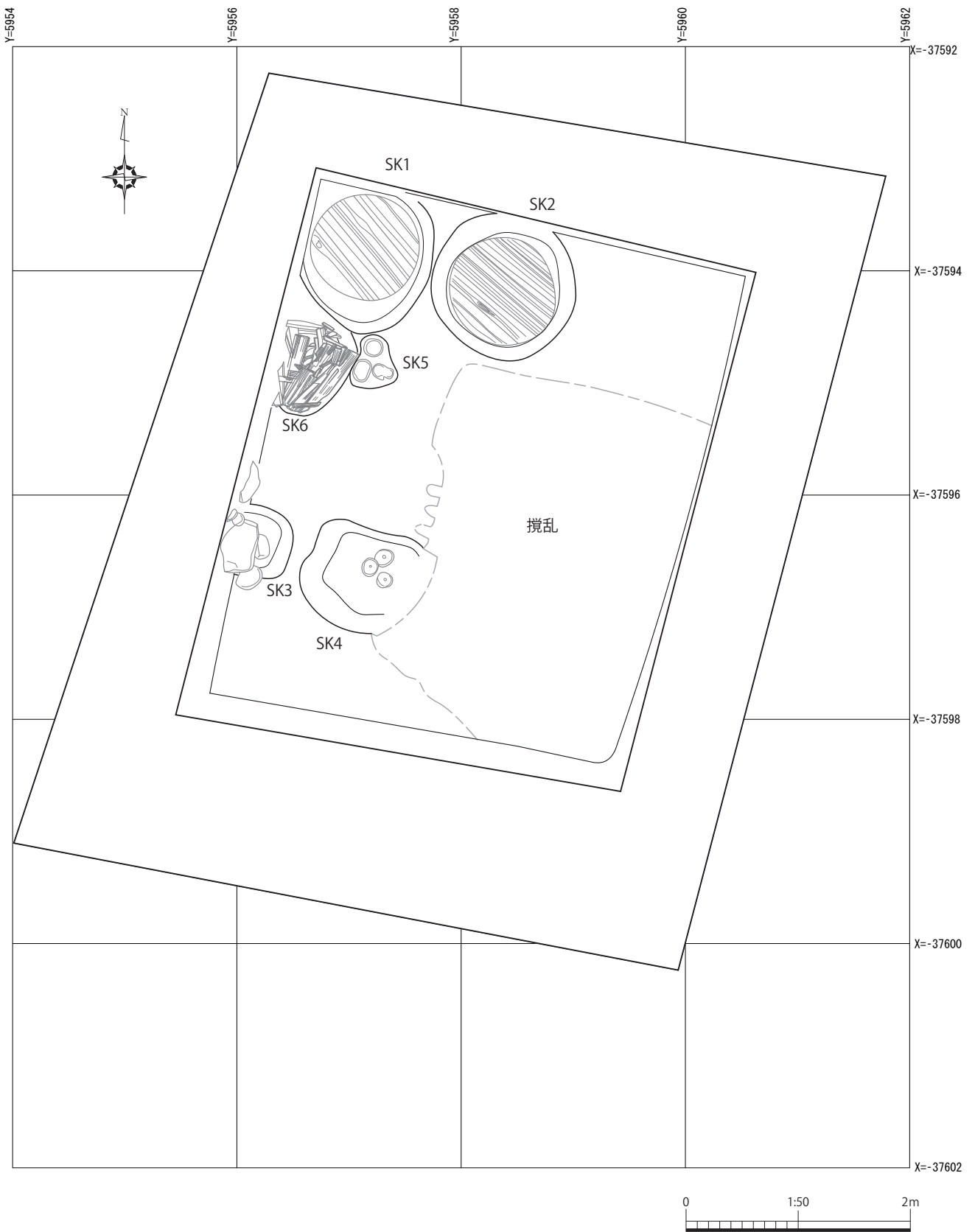
[形状・規模] 調査地点外に延びるため平面形の全容は不明だが、円形と推測される。桶は破損した状態で折り重なるように出土した。掘方は、底面は平坦で桶に沿って筒状に立ち上がる。

[出土遺物] (第 7 図・図版 5) 桶のほか陶器が少量出土した。16・17 は播鉢である。

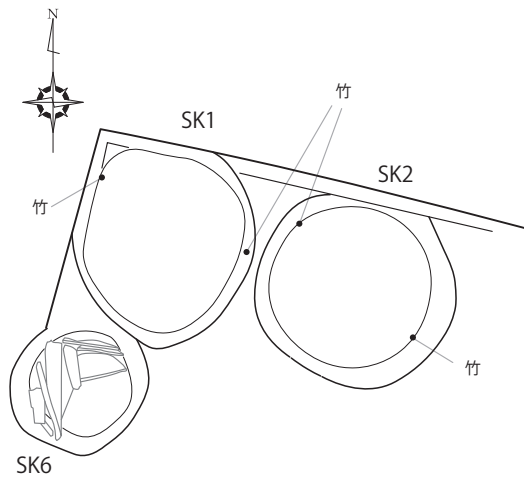
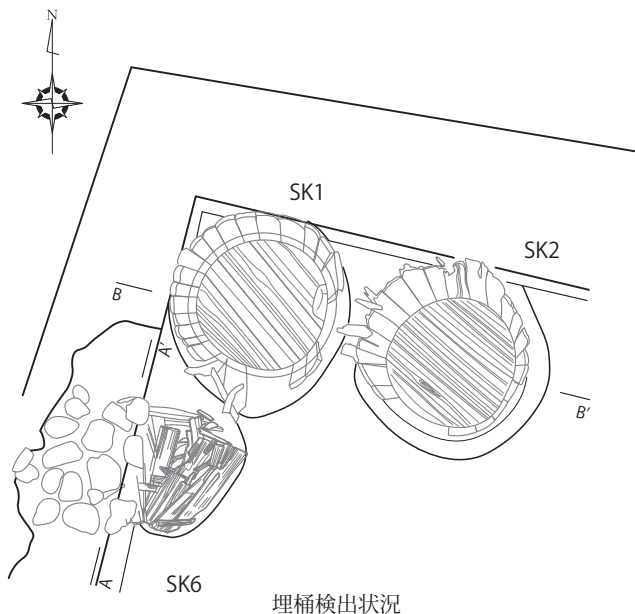
[時期] 検出状況と出土遺物から遺構の時期は近世である。

遺構外出土遺物 (第 8 図、図版 5)

18～27 は磁器である。18 は半球形の碗、19 は丸碗、20・21 は碗、22 は高台脇重ねの段重、23 は小皿、24・25 は瓶で 24 は銅板転写である。26・27 は蓋物蓋であり、27 は型紙摺りである。28～31 は陶器である。28 は灰釉の鉢、29 は急須、30 は筆立てか。31 は播鉢である。32 は文久永寶である。19・24・27 は明治期、他は江戸後半が多い。



第4図 調査地点全体図

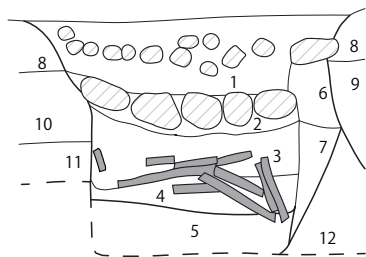


埋桶検出状況(SK6下層)・埋桶完掘状況(SK1・2)

266.3m
A

A'

0 1:50 2m



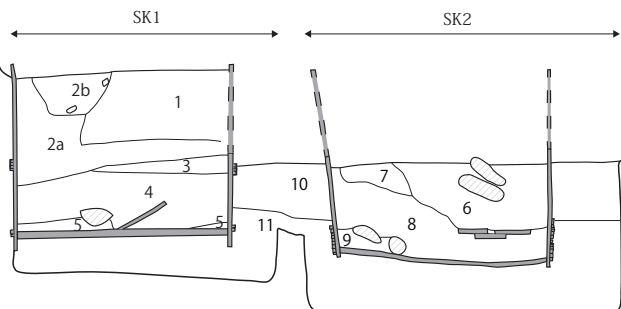
SK6 セクション

- 1 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂 白色粒10% 瓦・径10cm大の礫・石40%
- 2 黒褐色(2.5Y3/2)シルト 締まりゆるい 白色粒径1mm10%
- 3 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 白色粒5% 黒色粒5% 腐敗植物の塊含む
- 4 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 締まりゆるい
- 5 黒褐色(5Y3/1)粘土 IV層 一部青白く変色
- 6 黒褐色(2.5Y3/1)粘土
- 7 黒色(2.5Y2/1)粘土 黒色細粒砂含む
- 8 黒褐色(2.5Y3/2)粘土 とても良く締まる 赤色粒5% 酸化土30%
黒(10YR2/1)粘土ブロック10%
- 9 黒褐色(10YR3/1)粘土 SK1掘方埋土
- 10 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 白色粒3% 下部に酸化粘土を帯状に含む
黒褐(2.5Y3/2)粘土が斑らに混じる
- 11 黒褐色(10YR2/2)粘土 10cm間隔で酸化粘土を帯状に含む
- 12 黄灰色(2.5Y4/1)粘土 一部青白く変色 締まりゆるい

266.2m

B

B'

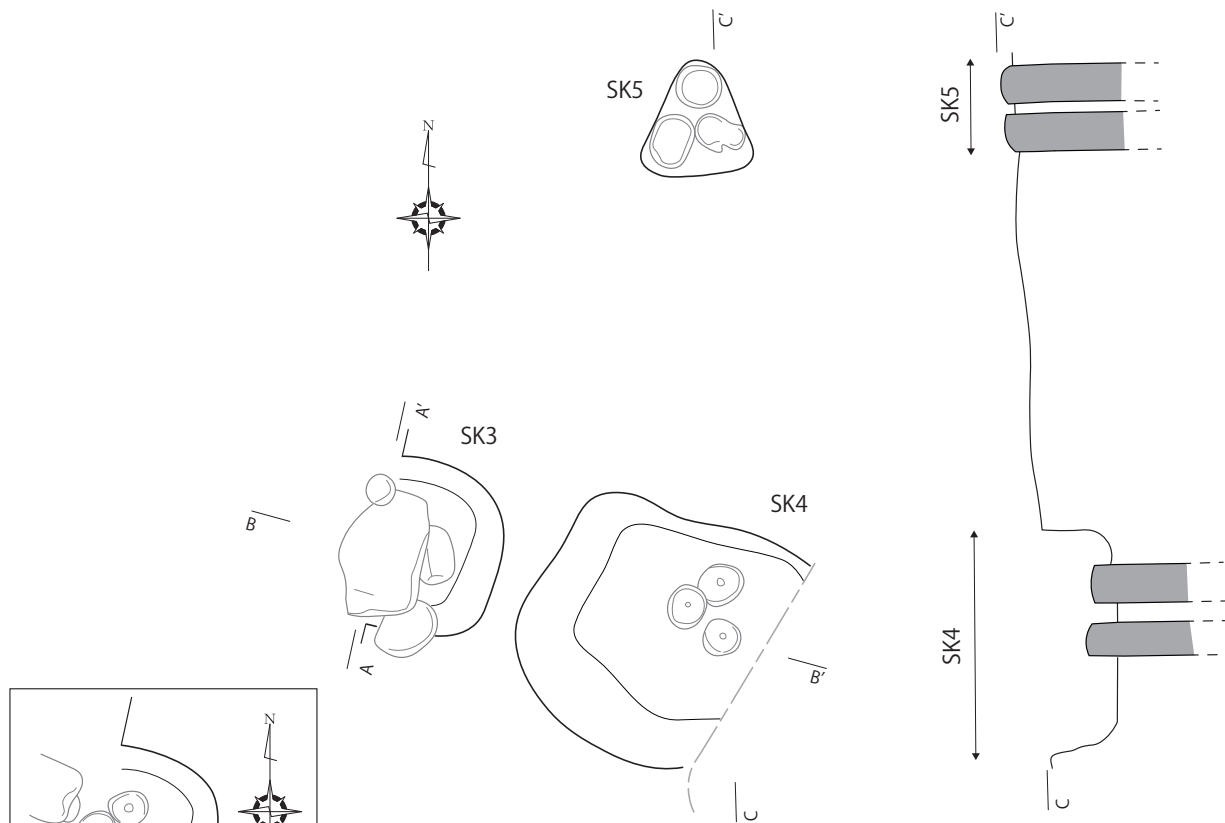


SK1・2 セクション

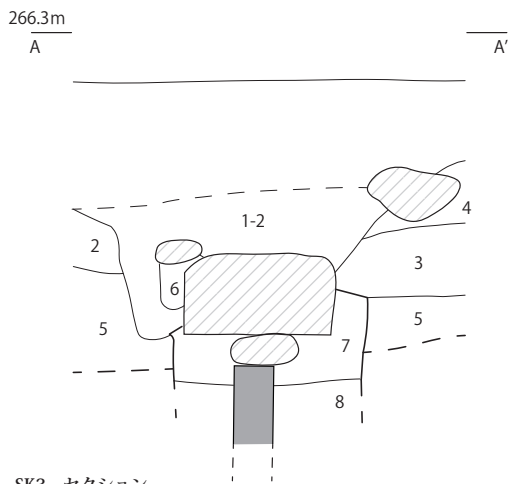
- 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂 2b層との境に酸化土を含む
- 2a 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 黒褐色粒を微量含む 良く締まる
- 2b 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 暗灰黄色粗粒砂が少量混じる
- 3 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂
- 4 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂 板材を含む
- 5 黒色(2.5Y2/1)細粒砂
- 6 暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂 良く締まる
- 7 黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂
- 8 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂
- 9 黒色(2.5Y2/1)細粒砂 繊維質含む
- 10 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 黄色粘土混じる 黄灰色砂混じる
- 11 黒色(5Y2/1)粘土 一部青白く変色 締まりゆるい

0 1:30 1m

第5図 遺構図(1)

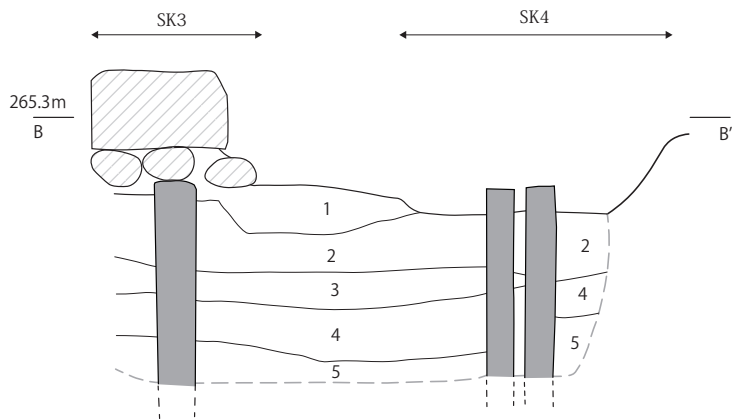


SK3礎石・SK4杭検出状況



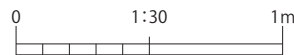
SK3 セクション

- 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗粒砂 白色粒10% 褐・黒粒5%
- 3 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 白色粒3% 7層との間に酸化粘土を帯状に含む
黒褐色(2.5Y3/2)粘土が斑らに交じる
- 4 黒褐色(2.5Y3/2)粘土 とてもよくしまる 赤色粒5% 酸化土30%
黒色(10YR2/1)粘土ブロック10%
- 5 黒褐色(10YR2/2)粘土 10cm間隔で酸化粘土を帯状に含む 自然堆積か
- 6 黒褐色(2.5Y3/1)シルト 白色粒10% 黒褐色細粒砂10%
- 7 灰色(5Y4/1)粘土 締まりゆるい 表面は黄灰色(2.5Y4/1)
- 8 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土 黒褐色(2.5Y3/1)粘土5%含む



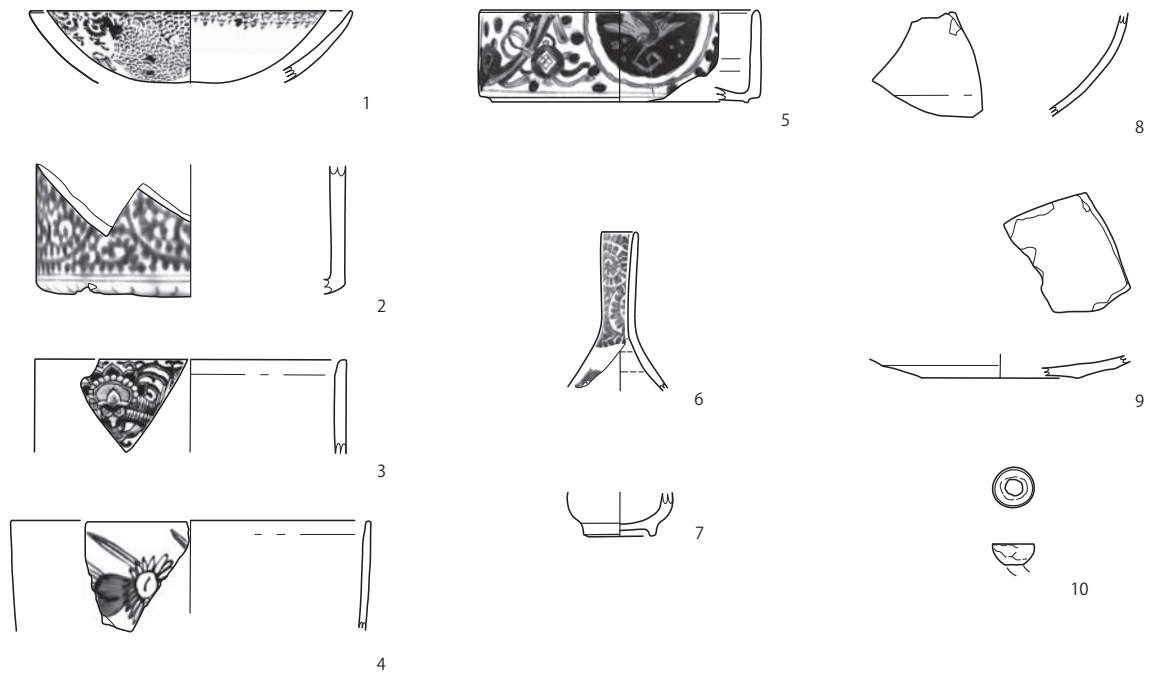
SK3・4 セクション

- 1 灰色(5Y4/1)粘土 締まりゆるい 表面は黄灰色(2.5Y4/1)
- 2 オリーブ黒色(5Y3/2)粘土 黒褐色(2.5Y3/1)粘土5%含む
- 3 オリーブ黒色(5Y3/2)シルト 黒褐色(2.5Y3/1)粘土5%含む
- 4 黒褐色(2.5Y3/1)粘土に細粒砂が混じる
- 5 黒褐色(2.5Y3/1)粘土 褐色砂塊が斑らに混じる

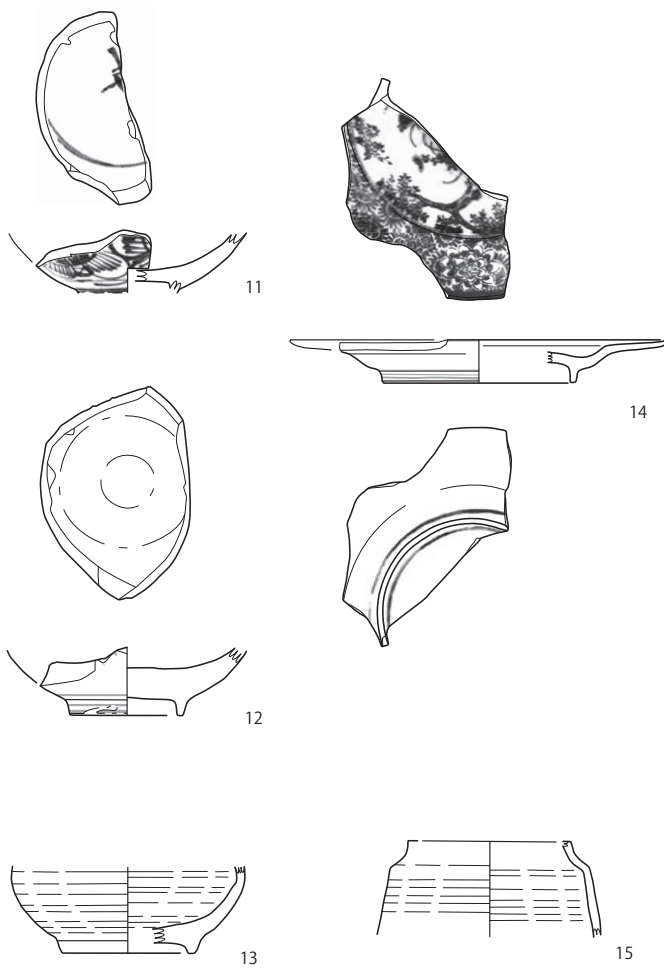


第6図 遺構図(2)

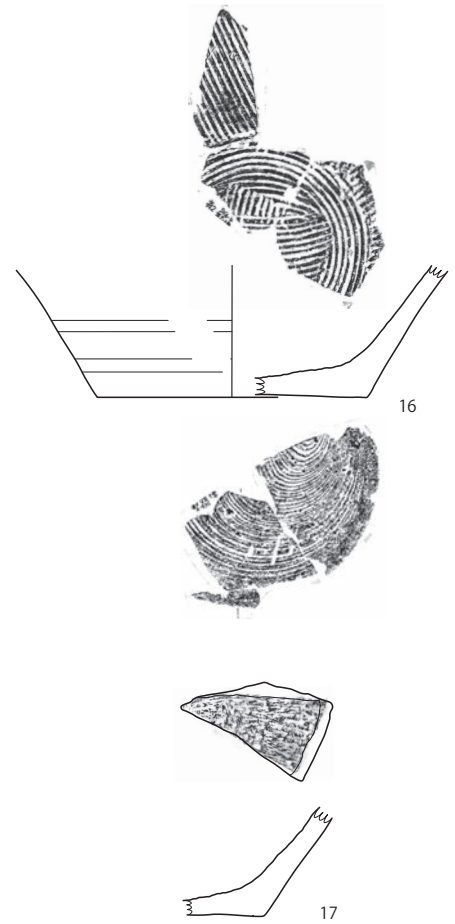
SK1



SK2



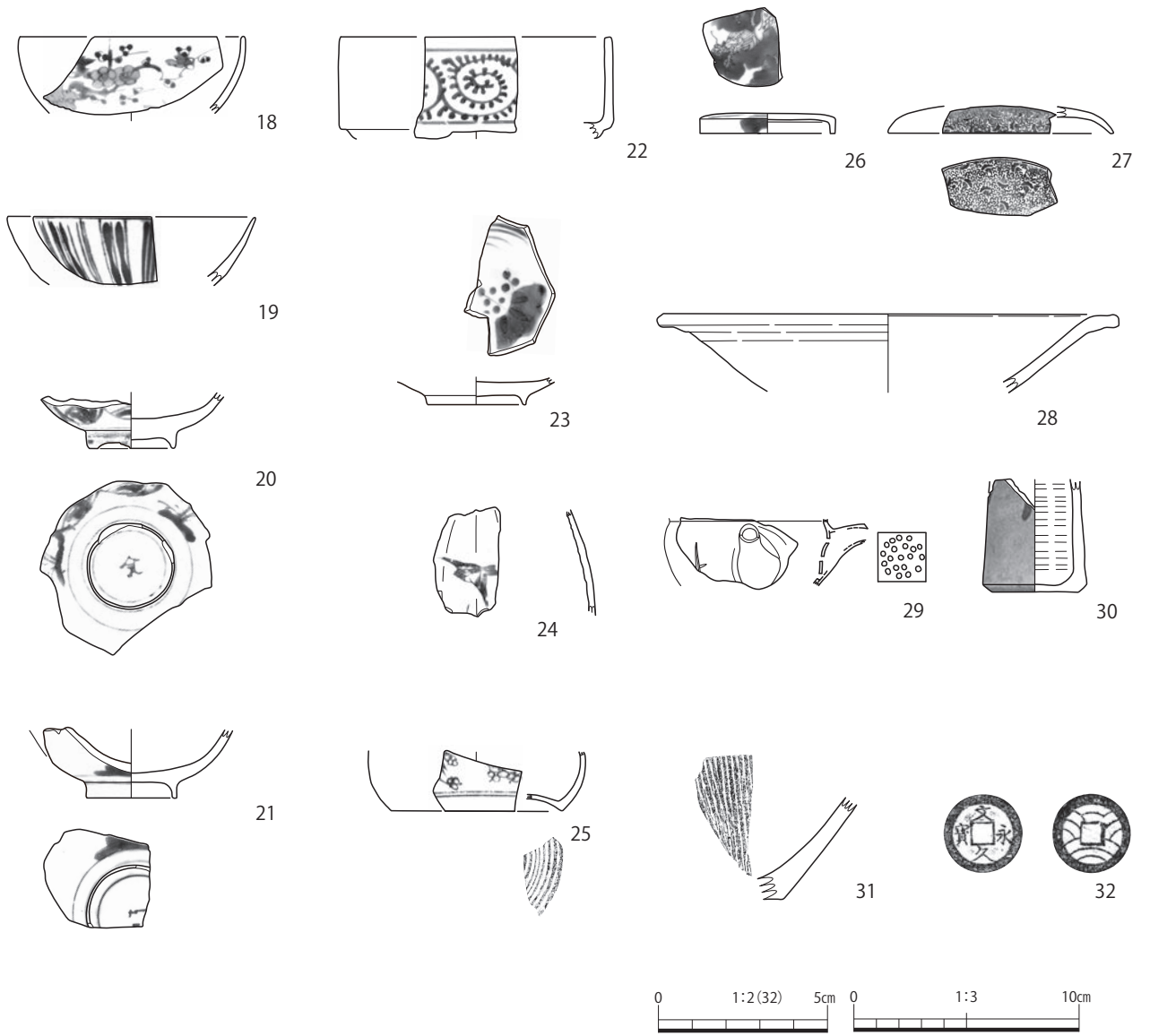
SK6



0 1:4(14-16) 10cm

0 1:3 10cm

第7図 出土遺物(1)



第8図 出土遺物(2)

第2表 遺物観察表

報告書 番号	遺構	種別	器種	形状	法量 (cm)			部位	成形技法	釉薬	絵付 装飾技法	胎土含有物	推定産地	推定生産年代	備考	
					() 口径	() 底径	() 復元値・ () 残存値 器高									
1	SK1	磁器	碗	平碗	(12.4)	—	<2.8>	口縁小片～体部小片	轆轤成形	透明釉	染付・型紙摺り	黒色粒	瀬戸・美濃系	19c (明治)		
2	SK1	磁器	鉢	半筒形	—	—	<5.0>	体部小	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	18～19c	桐唐草文	
3	SK1	磁器	蓋物	半筒形	(12.0)	—	<3.6>	口縁～体部	轆轤成形	透明釉	染付・銅板転写	黒色粒	肥前系	19c (明治)		
4	SK1	磁器	蓋物	半筒形	(14.0)	—	<4.3>	口縁1/8	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	18～19c		
5	SK1	磁器	段重	高台脇重ね	(10.6)	(10.0)	5.6	口縁1/3～底部1/4	轆轤成形	透明釉	色絵	黒色粒	肥前系	18c		
6	SK1	磁器	瓶	辣非形(鶴首)	1.4	—	<6.1>	口縁～体部小	轆轤成形	透明釉	染付・銅板転写	黒色粒	瀬戸・美濃系	19c (明治)		
7	SK1	磁器	小瓶	—	—	2.4	<1.7>	体部～底部	轆轤成形	透明釉	染付	—	肥前系	19c	青土瓶	
8	SK1	陶器	土瓶	—	—	—	<4.0>	体部小片	轆轤成形	緑釉	—	—	—	19c	内面火罨?	
9	SK1	陶器	土瓶	—	—	(6.0)	<0.9>	体部小～底部1/4	轆轤成形	透明釉	—	—	—	—	—	火皿のみ
10	SK1	金属	煙管	—	1.6	1.6	<0.8>	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	SK2	磁器	碗	丸碗	—	—	<2.3>	体部	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	瀬戸・美濃系	19c (明治初)		
12	SK2	磁器	中碗	丸碗	—	4.3	<2.6>	底部	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	18c	見込みに疵の目状釉剥ぎ	
13	SK2	磁器	瓶	辣非形	—	(5.0)	<3.3>	底部1/4	轆轤成形	透明釉	—	黒色粒、細石	肥前系	18～19c	内面無釉	
14	SK2	磁器	中皿	折縁形	(19.4)	(9.8)	2.2	口縁小～底部1/3	轆轤成形	透明釉	染付・型紙摺り・手描	黒色粒	肥前系	19c (明治)		
15	SK2	陶器	蓋物	合子	(6.2)	—	<3.7>	口縁小片～体部小片	轆轤成形	灰釉	—	黒色粒	肥前系	—		
16	SK6	陶器	搥鉢	—	—	(14.0)	<6.8>	体部小～底部1/4	轆轤成形	鉄釉	—	黒色粒	瀬戸・美濃系	19c 初頭	底部回転糸切り	
17	SK6	陶器	搥鉢	—	—	—	<4.2>	体部小～底部小	轆轤成形	鉄釉	—	白色細石	堺・明石系	19c		
18	遺構外	磁器	小碗	半球碗	(10.0)	—	<3.4>	口縁1/4～体部小	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	18c 初頭		
19	遺構外	磁器	中碗	丸碗	(11.0)	—	(3.0)	口縁～体部	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	瀬戸・美濃系	19c (明治初)		
20	遺構外	磁器	碗	—	—	3.8	<2.5>	体部小～底部	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	18～19c		
21	遺構外	磁器	碗	—	—	<4.0>	<3.0>	体部小～底部1/4	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	18～19c		
22	遺構外	磁器	段重	高台脇重ね	(12.0)	(9.0)	4.5	口縁1/8～底部小	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	18～19c	焼継痕あり	
23	遺構外	磁器	小皿	—	—	(4.4)	<1.2>	底部1/4	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	肥前系	19c		
24	遺構外	遺構外	磁器	瓶	—	—	—	体部小	轆轤成形	透明釉	染付・銅板転写	黒色粒	瀬戸・美濃系	19c (明治)		
25	遺構外	遺構外	磁器	土瓶	—	—	(7.6)	底部小片	轆轤成形	透明釉	染付・イッチン	黒色粒	肥前系	19c (明治)	底に同心円状の彫り	
26	遺構外	遺構外	磁器	蓋物蓋	合子蓋	(6.0)	(6.0)	口縁～体部	轆轤成形	透明釉	染付	黒色粒	瀬戸・美濃系	19c		
27	遺構外	遺構外	磁器	蓋物蓋	—	(10.0)	—	体部小～受部1/5	轆轤成形	透明釉	染付・型紙摺り	黒色粒	肥前系	19c (明治)		
28	遺構外	陶器	鉢	—	(20.0)	—	<3.5>	口縁小～体部小	轆轤成形	灰釉	—	黒色粒、白色粒	—	—	混入多	
29	遺構外	陶器	急須	—	—	—	<3.0>	注口	轆轤成形	無釉	—	—	萬古焼か	—	内外面に布目痕あり	
30	遺構外	陶器	筆立て	—	—	3.8	<5.0>	底部	轆轤成形	灰釉	鉄絵	—	信楽か	—		
31	遺構外	陶器	搥鉢	—	—	<1.0>	<4.5>	底部小片	轆轤成形	—	—	白色細石	堺・明石系	19c		
32	遺構外	金属	銭貨	—	2.7	2.7	0.05	ほぼ完形	—	—	—	—	—	1863～1867	文久永寶 真文	
—	SK1	桶	—	—	87.0	84.5	73.0	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	SK2	桶	—	—	(93.0)	(84.0)	<72.0>	—	—	—	—	—	—	—	—	
—	SK6	桶	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

第5章 自然科学分析

第1節 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）から得られた昆虫について

森 勇一（東海シニア自然大学）・株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

山梨県甲府市の甲府城下町遺跡は、江戸時代における城下の繁栄ぶりについて昆虫組成を通して知ることができるとわが国最古の遺跡である。これまでの分析を通じて、ヒトの集中居住や穀物貯蔵の実態をはじめ、多くの情報が得られてきた（森・山本，2020；森・株式会社パレオ・ラボ，2021；同，2022）。

本論では、甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）の調査で得られた昆虫分析について述べる。なお、同じ堆積物を用いて大型植物遺体分析も行われている（別項参照）。

2. 試料と方法

昆虫試料は、表1および表2に示した計2試料である。試料が採取された遺構は、試料1がSK1、試料2がSK2で、いずれも埋桶である。層位は試料1、試料2ともに不明である。遺構の時期は、1863年以前の江戸時代後期から末期とされている。

堆積物試料の水洗は遺跡調査のスタッフにより行なわれ、試料1、試料2ともに500ccが、最小0.5mm目の篩を用いて水洗された。昆虫の抽出および同定は、実体顕微鏡下で行った。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されているため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示していない。

3. 分析結果および考察

試料1から計41点、試料2から13点の、計54点の標本類が確認された（表2）。54点の中には、5点の淡水貝片、1点の魚鱗が含まれるため、実際に得られた昆虫化石は48点である。産出した標本類のうち、主なものについては、図版1に実体顕微鏡写真を掲げた。

生態別にみると、水生昆虫が3点、地表性で汚物食ないし雑食性のハエ目が計23点（47.9%）、これ以外は不明甲虫を除き、すべて食糞性ないし雑食性の地表性昆虫であり、陸生の食植性昆虫は確認されなかった。ハエ目は、いずれもサナギ（囲蛹）片である。

最も多産した昆虫は、汚物や生活ゴミに多いオオクロバエ *Calliphora lata*（19点）であった。本種の幼虫やサナギの後方気門は末端節の陥凹部に位置していて、末端節周囲には6対の棘状突起がリング状に配置され（図版1の6）、こうした特徴により便池内において空気室をつくり、酸素呼吸するのに適している（鈴木・緒方，1968）。同じ気門配置は、同様の環境下で生息するセンチクバエ *Boettcherisca peregrina* にも認められ、両者はかつての汲み取り便所の便槽内に特徴的に見られるハエであった。これに、イエバエ *Musca domestica* やキンバエ *Lucilia caesar*、ショウジョウバエ属 *Drosophila sp.* などのハエ類が随伴する点が、今回の試料の特徴といえる。イエバエは、オオクロバエとは異なり、便槽内では生活せず、生活ゴミや食品類に集まる。キンバエは、動物質食品の腐敗物や地表面上の獣糞などに飛来する。また、ショウジョウバエ属は発酵食品に特有であり、便池に認められるハエではない。したがって、このようなハエ類の多産は、試料採取場所である埋桶が便槽として利用されていた遺構ではない点を示している。

本分析試料では、食糞性昆虫として知られるマグソコガネ *Aphodius rectus* が計7点得られた点が特筆される。マグソコガネは、従来馬糞から見いだされる場合が多かったために名づけられた糞虫の代表種であるが、遺跡における本種は、ヒトの集中居住や地表面汚染の指標種（森，2020）として知られ、随伴したエンマコガネ属 *Onthophagus sp.* や、イエバエ・キンバエなどのハエ類とともに、甲府城下町（丸の内3丁目）における賑わい

を示す昆虫化石とみて差し支えない。

わずか1点であるが、試料1からカバイロヒョウホンムシ *Pseudeurostus hilleri* が検出された点は重要である。ヒョウホンムシは卵形または倒卵形の独特の形状をした昆虫であるが、乾燥した動・植物質を加害し、動物標本をも食害することからその名がある（安富・梅谷，1983）。カバイロヒョウホンムシは体長1.9～3.0mmの微小昆虫であるが、世界に広まった日本原産の数少ない家屋害虫の一つとされ、ときに汲み取り便所の壁からも採集されるという（久松，1970）。本種は穀物貯蔵所や倉庫などに特有で、食糧倉庫等に発生する腐敗動植物質を食べて生活する貯穀害虫の仲間である（日本家屋害虫学会編，1995）。

昆虫ではないが、試料1からサカナのウロコ（魚鱗）とイシガイの一種と考えられる殻皮が見つかった点も興味深い。サカナのウロコは埋桶がゴミ捨て場として機能していた可能性を示しており、イシガイの一種は、食用に供されたとすれば、やはりゴミ捨て場の可能性を補強する。なお、イシガイの一種はシジミ類の仲間（ヤマトシジミやマシジミ）である可能性も否定できない。

4. まとめ

甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）から採取された2試料を分析し、計48点の昆虫化石を確認した。本試料にはオオクロバエのサナギが多数含有され、イエバエやキンバエ・ショウジョウバエ属を伴うため、遺跡内にはヒトが多く居住し、地表環境が汚染されていたと考えられる。この結果は、人為による環境汚染を示すマグソコガネやエンマコガネ属の出現によっても支持される。

穀物貯蔵施設に特有の家屋害虫として知られるカバイロヒョウホンムシが得られているため、他の貯穀害虫は得られていないものの、遺跡の周りに穀類を貯蔵した倉庫などが存在した可能性がある。

引用文献

久松定成（1970）日本のヒョウホンムシ科。あげは，11，14-20.

森 勇一（2020）昆虫考古学を究める－遺跡産昆虫から得られた古環境およびヒトの営み。第四紀研究，Vol.59(2)，43-61.

森 勇一・山本 華（2020）甲府城下町遺跡（中央4丁目I工区）から出土した昆虫化石.

昭和測量株式会社編「甲府城下町遺跡XX」：473-488，甲府市教育委員会.

森 勇一・山本 華（2020）甲府城下町遺跡（中央4丁目II・相生工区）から出土した昆虫化石.

昭和測量株式会社編「甲府城下町遺跡XX」：523-528，甲府市教育委員会.

森 勇一・株式会社パレオ・ラボ（2021）甲府城下町遺跡（中央5丁目1区）から出土した昆虫組成について.

昭和測量株式会社編「甲府城下町遺跡26（中央5丁目1区）」：172-182，

山梨県中北建設事務所・甲府市教育委員会.

森 勇一・株式会社パレオ・ラボ（2022）甲府城下町遺跡から発見された昆虫化石と古環境.

昭和測量株式会社編「甲府城下町遺跡29（山梨県甲府市中央5丁目2～4区）」：324-334，

山梨県中北建設事務所・甲府市教育委員会.

日本家屋害虫学会編（1995）家屋害虫事典. 468p，井上書院.

鈴木 猛・緒方一喜（1968）日本の衛生害虫-その生態と防除-. 245p，新思想社.

安富和男・梅谷献二（1983）衛生害虫と衣食住の害虫. 310p，全国農村教育協会.

表 1-1 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）昆虫リスト

試料 1

	和名	学名	部位	長さ(幅) mm	写真	食性	生態
1	マダソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	右上翅	2.2	25,26	食糞性	地表性
2	ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.	左上翅上半部	4.8	27,28	雑食性	地表性
3	マダソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	右上翅片	3.1	29,30	食糞性	地表性
4	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	4.5	31	汚物食	屋外性など
5	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	4.2	32,33	汚物食	屋外性など
6	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	3.2	34	汚物食	屋外性など
7	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片		35,36	汚物食	屋外性など
8	コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	腹部腹板	2.9	37,38	食植性	水生
9	イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	囲蛹片	2.1	39	雑食性	屋内性
10	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	2.5	31	汚物食	屋外性など
11	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	2.0	32,33	汚物食	屋外性など
12	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	3.1	34	汚物食	屋外性など
13	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	4.5	35,36	汚物食	屋外性など
14	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	2.4	31	汚物食	屋外性など
15	魚鱗	Pices fam. gen. et sp. indet.		4.1	41-43		
16	キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	囲蛹片		44-46	雑食性	屋外性など
17	コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	腹部腹板	3.1	47,48	食植性	水生
18	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	4.8	49-51	汚物食	屋外性など
19	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	2.6		汚物食	屋外性など
20	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	3.4		汚物食	屋外性など
21	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	4.2		汚物食	屋外性など
22	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	2.9	52,53	汚物食	屋外性など
23	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	1.8		汚物食	屋外性など
24	カバイロヒョウホシムシ	<i>Pseudeurostus hilleri</i> (Reitter)	左上翅	1.6	54,55	雑食性	家屋害虫
25	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	2.7	56-58	汚物食	屋外性など
26	ガムシ科	Hydrophilidae gen. et sp. indet.	腹部腹板片	2.6	59	食植性	水生
27	ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	前胸背板片	1.6	60	食屍性	地表性
28	マダソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	上翅片	1.7		食糞性	地表性
29	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	1.8		汚物食	屋外性など
30	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	1.3		汚物食	屋外性など
31	オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	囲蛹片	2.2		汚物食	屋外性など
32	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	部位不明	1.5		不明	不明
33	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	上翅片	1.4		不明	不明
34	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	上翅片	2.0		不明	不明
35	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	前胸背板片	1.0		不明	不明
36	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	部位不明	1.6		不明	不明
37	イシガイの一種	Unionidae gen. et sp. indet.	殻皮片	21.0			
38	イシガイの一種	Unionidae gen. et sp. indet.	殻皮片	18.0			
39	イシガイの一種	Unionidae gen. et sp. indet.	殻皮片	18.0			
40	イシガイの一種	Unionidae gen. et sp. indet.	殻皮片	12.0			
41	イシガイの一種	Unionidae gen. et sp. indet.	殻皮片	11.0			

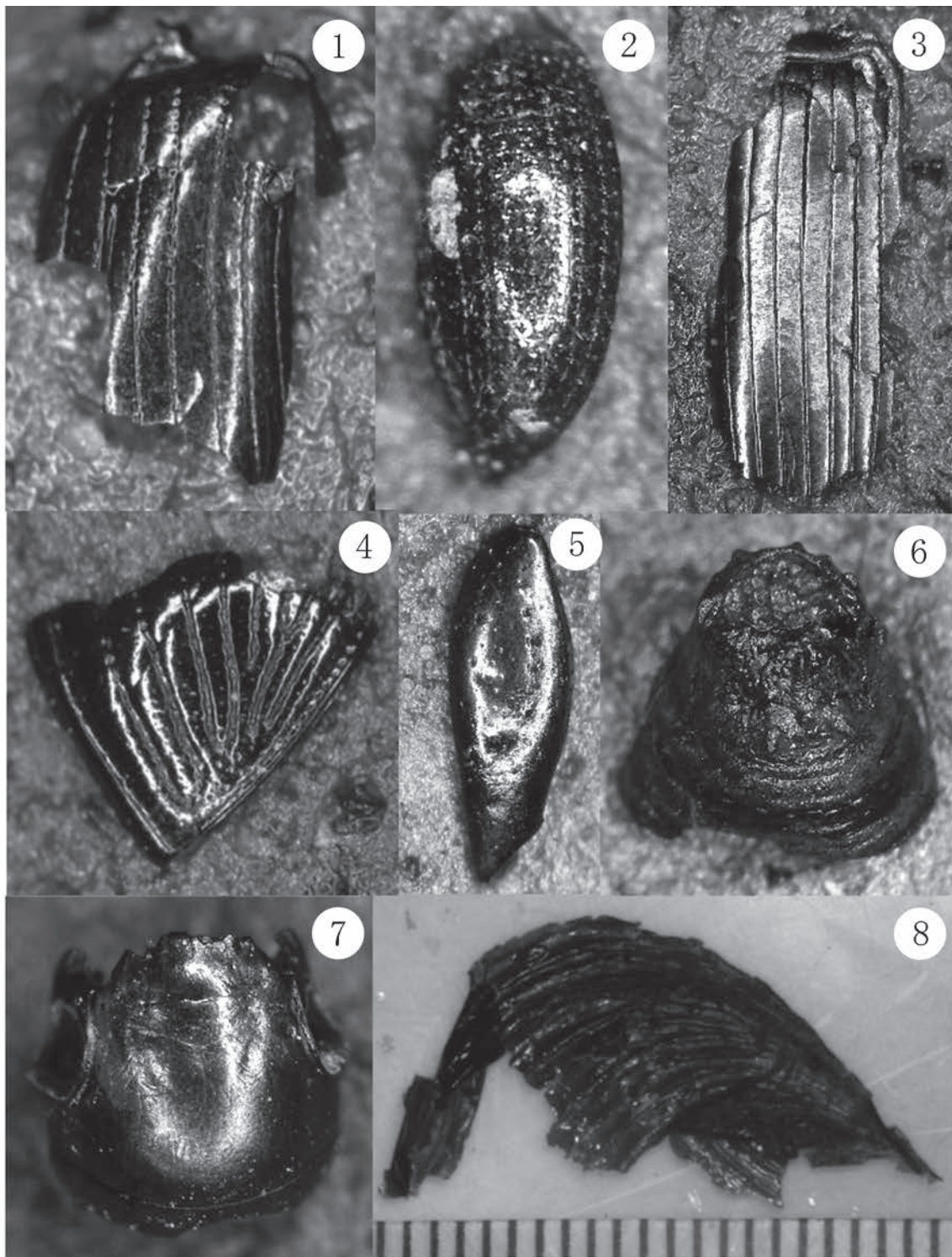
表 1-2 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）昆虫リスト

試料2

	和名	学名	部位	長さ (mm幅)	写真	食性	生態
1	マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	右上翅	3.1	61-64	食糞性	地表性
2	マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	右上翅翅端部	1.5	65-66	食糞性	地表性
3	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	左後腿節	2.2	67-68	食糞性	地表性
4	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	後脛節	1.9	69-70	汚物食	屋外性など
5	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.1	71	発酵物食	屋内性
6	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	頭部	1.5	72	雑食性	地表性
7	マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	上翅片	1.2	73	食糞性	地表性
8	ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae gen. et sp. indet.	前胸背板片	1.6	74	雑食性	地表性
9	ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.	囲蛹片	1.5	75	発酵物食	屋内性
10	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.	頭部片	1.2		雑食性	地表性
11	マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	上翅片	1.0		食糞性	地表性
12	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	部位不明	1.4		不明	不明
13	不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	上翅片	1.3		不明	不明

表 2 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）における昆虫分析結果

				試料 1	試料 2	合 計
水生	食 植 性	和名	学名			
		ガムシ科	Hydrophilidae gen. et sp. indet.	1		1
		コガムシ	<i>Hydrochara affinis</i> (Sharp)	2		2
地表性	食 糞 性	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.		2	2
		マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	3	4	7
	雑 食 性	オサムシ科	Carabidae gen. et sp. indet.		2	2
		ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.	1		1
		ハネカクシ科	Staphylinidae gen. et sp. indet.	1		1
		ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae gen. et sp. indet.		1	1
		カバイロヒョウホンムシ	<i>Pseudeurostus hilleri</i> (Reitter)	1		1
そ の 他		イエバエ	<i>Musca domestica</i> Linnaeus	1		1
		オオクロバエ	<i>Calliphora lata</i> Coquillett	19		19
		キンバエ	<i>Lucilia caesar</i> (Linnaeus)	1		1
		ショウジョウバエ属	<i>Drosophila</i> sp.		2	2
		不明甲虫	Coleoptera fam. gen. et sp. indet.	5	2	7
		イシガイの一種	Unionidae gen. et sp. indet.	5		5
魚鱗	Pices fam. gen. et sp. indet.	1		1		
		計		41	13	54



図版1 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）から得られた昆虫化石の顕微鏡写真

1. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 右上翅 長さ2.2mm (試料1, 標本1)
2. カバイロヒョウホムシ *Pseudeurostus hilleri* (Reitter) 左上翅 長さ1.6mm (試料1, 標本24)
3. ツヤヒタラゴミムシ属 *Synuchus* sp. 左上翅上半部 長さ4.8mm (試料1, 標本2)
4. マグソコガネ *Aphodius rectus* (Motschulsky) 右上翅翅端部 長さ1.5mm (試料2, 標本2)
5. エンマコガネ属 *Onthophagus* sp. 左後腿節 長さ2.2mm (試料2, 標本3)
6. オオクロバエ *Calliphora lata* Coquillett 囲蛹片 長さ4.2mm (試料1, 標本5)
7. オサムシ科 *Carabidae* gen. et sp. indet. 頭部 長さ1.5mm (試料2, 標本6)
8. イシガイの一種 *Unionidae* gen. et sp. indet. 殻皮片 長さ21.0mm (試料1, 標本37)

第2節 甲府城下町遺跡（丸の内3）出土の動物遺体

三谷智広（パレオ・ラボ）

1. はじめに

甲府城下町遺跡（丸の内3）から出土した動物遺体の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

動物遺体が出土したのは埋桶（SK1）である。時期は、1863年以前である。同定では、肉眼で試料を観察し、標本との比較により部位と分類群を同定した。

3. 結果と考察

埋桶（SK1）からは、無尾目（カエル類）の肩甲骨1点、大腿骨3点、脛腓骨2点、腸骨2点、魚類でアジ科の舌顎骨1点、哺乳類でネズミ科の脛骨1点が同定された（表1）。カエル類は、大きさの異なる大腿骨や腸骨があり、いくつかの種が含まれている可能性もある。

表1 甲府城下町遺跡（丸の内3）動物遺体の同定結果

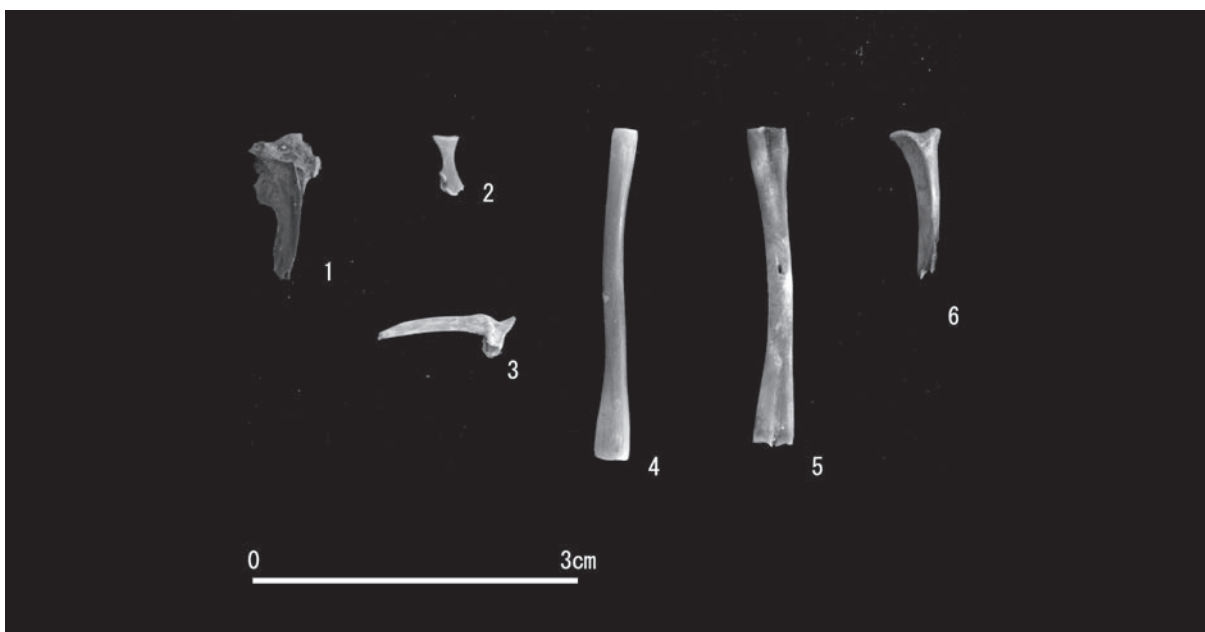
遺構	分類群	部位	左右		部分・状態
			L	R	
埋桶 (SK1)	無尾目	肩甲骨		1	ほぼ完存
		大腿骨	2	1	ほぼ完存
		脛腓骨	1	1	ほぼ完存
		腸骨	1	1	ほぼ完存
		ネズミ科	脛骨		1
	アジ科	舌顎骨	1		ほぼ完存

カエル類については、鉢に入れて飼養したり、薬の材料として利用される例もある。またネズミ科についても、薬の材料としての利用例が記されている（岡田，1979）。アジ科については、食用とされる場合が多い。

このように、今回同定された動物には様々な利用法が考えられるが、埋桶への混入の可能性も考慮し、慎重に議論する必要がある。

引用・参考文献

- 松井 章（2008）動物考古学. 312p, 京都大学学術出版会.
 岡田章雄（1979）日本史小百科 動物. 347p, 近藤出版社.



図版1 甲府城下町遺跡（丸の内3）出土の動物遺体（SK1 出土）

1. アジ科左舌顎骨 2. 無尾目右肩甲骨 3. 無尾目左腸骨 4. 無尾目左大腿骨 5. 無尾目左脛腓骨 6. ネズミ科右脛骨

第3節 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）から出土した大型植物遺体

バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

甲府城下町遺跡は、江戸時代から近代の遺跡である。ここでは、甲府城下町遺跡の丸の内3丁目で検出された埋桶より得られた大型植物遺体の同定結果を報告し、当時の利用植物の一端について検討する。

2. 試料と方法

試料は、いずれも水洗選別後に抽出済みの試料で、埋桶 SK1 から採取された 1 試料と、埋桶 SK2 から採取された 2 試料の、計 3 試料である。埋桶は、1863 年以前の遺構とされている。

土壌の採取から水洗、種実の抽出までの作業は、昭和測量株式会社によって行われた。水洗に使用した篩の網目の大きさは不明である。水洗量は、表 1 を参照されたい。種実の同定・計数は肉眼および実体顕微鏡下で行い、写真撮影は実体顕微鏡で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。その他、計数が困難な微細な昆虫遺体の破片、動物遺体の破片は記号 (+) で示した。同定された試料は、甲府市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のブドウ種子とカキノキ種子の 2 分類群、草本植物ではオヒシバ属種子（穎果）とヒエ属有ふ果、イネ籾殻、エノコログサ属有ふ果、ムラサキケマン種子、キンポウゲ属果実、アサ核、メロン仲間種子、ヤナギタデ果実、サナエタデーオオイヌタデ果実、ウナギツカミ果実、ミチヤナギ属果実、ナス種子、ゴマ種子、エゴマ果実、シソ属果実、キク科果実の 17 分類群の、計 19 分類群が得られた。この他に、科以上の詳細な同定ができなかった種実を不明 A 種実とした。また、大型植物遺体以外に、不明動物遺体と不明昆虫遺体も得られたが、同定の対象外とした（表 1）。

以下に、出土した大型植物遺体を遺構別に記載する。

SK1：ブドウがやや多く、カキノキとイネ、アサ、メロン仲間、ゴマ、エゴマ、シソ属がわずかに得られた。

SK2：ミチヤナギ属が少量、ブドウとカキノキ、オヒシバ属、ヒエ属、イネ、エノコログサ属、ムラサキケマン、キンポウゲ属、メロン仲間、ヤナギタデ、サナエタデーオオイヌタデ、ウナギツカミ、ナス、ゴマ、キク科がわずかに得られた。

次に、得られた主要な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

(1) ブドウ *Vitis vinifera* L. 種子 ブドウ科

暗褐色で、上面観は楕円形、側面観は基部が尖った倒心形に近い倒卵形。基部は太く円柱状に突出し、先端が丸い。背面の中央もしくは基部寄りに匙状の着点があり、腹面には中央の鈍稜上に 1 本の縦筋が走り、その両側に細く深い溝孔が 2 つある。種皮は薄く、硬い。長さ 6.8mm、幅 4.5mm、厚さ 3.2mm。基部が太く円柱状に突出して先端が丸いため、栽培種のブドウと同定した。

(2) カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. 種子 カキノキ科

暗褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形。基部がやや曲がって突出する。表面にはちりめん状のしわが見られる。長さ 7.9mm、幅 3.8mm。

(3) ヒエ属 *Echinochloa* spp. 有ふ果 イネ科

黄褐色で、側面観は紡錘形、縦方向に細かい筋がある。内穎は膨らまず、外穎は中央部が最も膨らむ。長さ 1.7mm、幅 1.0mm。那須（2017）に示された現生種の長幅比と比較すると、栽培型のヒエよりも野生植物のイヌビエの長幅比に近い。

(4) イネ *Oryza sativa* L. 籾殻 イネ科

黄褐色で、上面観は楕円形、側面観は長楕円形。2 条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線状の

顆粒状突起が規則正しく並ぶ。長さ 7.0mm、幅 3.0mm。

(5) アサ *Cannabis sativa* L. 核 アサ科

灰色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は倒卵形で側面に稜がある。下端にはやや突出した楕円形の大きな着点がある。表面には脈状の模様がある。長さ 4.1mm、幅 3.6mm、厚さ 2.7mm。

(6) メロン仲間 *Cucumis melo* L. 種子 ウリ科

淡褐色で、上面観は扁平、側面観は狭卵形で頂部が尖る。幅狭で、やや厚みがある。長さ 6.9mm、幅 3.0mm。藤下 (1984) によると、種子の大きさから雑草メロン型 (長さ 6.0mm 以下)、マクワウリ・シロウリ型 (長さ 6.1 ~ 8.0mm)、モモルディカメロン型 (長さ 8.1mm 以上) のおおむね 3 群に分けられるが、今回同定されたメロン仲間種子は長さ 6.9mm で、マクワウリ・シロウリ型であった。

(7) ナス *Solanum melongena* L. 種子 ナス科

褐色で、完形ならば上面観は長楕円形、側面観は楕円形。着点は明瞭に窪む。表面には畝状突起が覆瓦状となる細かい網目状隆線がある。長さ 2.9mm、残存幅 2.9mm。

(8) ゴマ *Sesamum orientale* L. 種子 ゴマ科

褐色で、完形ならば上面観は扁平、側面観は狭倒卵形。表面は平滑で、縁に沿って浅い溝がある。長さ 3.1mm、残存幅 1.4mm。

(9) エゴマ *Perilla frutescens* (L.) Britton var. *frutescens* 果実 シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部に着点があり、やや突出する。表面には不規則で多角形の浅い網目状隆線がある。長さ 2.2mm、幅 2.0mm。

(10) シソ属 *Perilla* spp. 果実 シソ科

暗褐色で、いびつな球形。端部に着点がある。表面には、低い隆起で多角形の網目状隆線がある。長さ 1.6mm、幅 1.4mm。

(11) 不明 A Unknown A 種実

淡褐色で、上面観は楕円形、側面観は線形。表面はざらつき、木質。長さ 5.1mm、幅 2.1mm。

4. 考察

甲府城下町遺跡(丸の内 3 丁目)の 1863 年以前の埋桶(SK1 と SK2)から出土した大型植物遺体を同定した結果、栽培植物で果樹のブドウとカキノキ、水田作物のイネ、畑作物のアサ、メロン仲間 (マクワウリ・シロウリ型)、ナス、ゴマ、エゴマが得られた。特に SK1 からは、ブドウがやや多く得られた。

カキノキは、果肉を食べた後に捨てられた可能性がある。さらに、ブドウも果実が食用可能なため、食後の残渣 (種子) が廃棄された可能性がある。イネやアサ、メロン仲間 (マクワウリ・シロウリ型)、ナス、ゴマ、エゴマは、食べられない部位や残滓が廃棄された可能性が考えられる。これ以外の草本植物では、湿地性植物のヒエ属やヤナギタデ、ウナギツカミ、乾いた場所を好むオヒシバ属やエノコログサ属、ムラサキケマン、キンポウゲ属、サナエタデーオオイヌタデ、ミチヤナギ属、シソ属、キク科が産出しており、周辺に生育していたと考えられる。

引用文献

藤下典之 (1984) 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法。

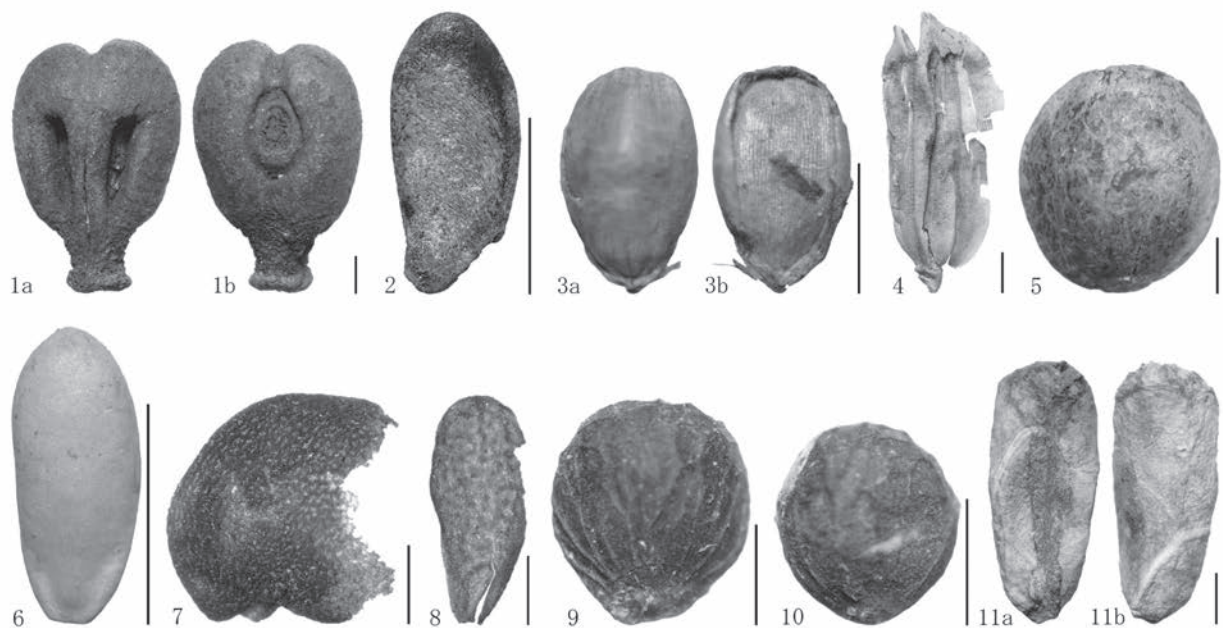
渡辺直経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学—総括報告書」: 638-654, 同朋舎出版。

那須浩郎 (2017) 縄文時代にヒエは栽培化されたのか? SEEDS CONTACT, 4, 27-29.

米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名—学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

表1 甲府城下町遺跡（まるのうち3丁目）から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

時期 1863年以前	試料No.	1	2	3
+ : 1-9	出土地点	SK1	SK2	
	取上No.	土サンプル①	土サンプル②	土サンプル③
分類群	水洗量 (g)	2220	3160	600
ブドウ	種子	105 (2)	1 (1)	
カキノキ	種子	1	1	
オヒシバ属	種子			1
ヒエ属	有ふ果		1 (5)	
イネ	籾殻	3	1	
エノコログサ族	有ふ果		1 (1)	
ムラサキケマン	種子		1	
キンボウグ属	果実		1	
アサ	核	2		
メロン仲間	種子	1	(2)	
ヤナギタデ	果実		(2)	2
サナエタデーオオイヌタデ	果実		1	
ウナギツカミ	果実		1	
ミチヤナギ属	果実		8	5
ナス	種子		1	
ゴマ	種子	(1)		(2)
エゴマ	果実	1		
シソ属	果実	4		
キク科	果実		1	
不明A	種実	4 (1)		
不明	動物遺体	(+)		
不明	昆虫遺体	(+)	(+)	(+)



スケール 1, 3-5, 7-11: 1mm, 2, 6: 5mm

図版1 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）から出土した大型植物遺体

1. ブドウ種子 (SK1、No.1)、2. カキノキ種子 (SK1、No.1)、3. ヒエ属有ふ果 (SK2、No.2)、4. イネ籾殻 (SK2、No.2)、5. アサ核 (SK1、No.1)、6. メロン仲間種子 (SK1、No.1)、7. ナス種子 (SK2、No.2)、8. ゴマ種子 (SK1、No.1)、9. エゴマ果実 (SK1、No.1)、10. シソ属果実 (SK1、No.1)、11. 不明A種実 (SK1、No.1)

第6章 総括

今回の調査では埋桶3基のほか、建物基礎遺構3基が検出された。また、埋桶の埋土より土壌試料を採取し動植物や昆虫の自然科学分析を行った。これらの検出状況や切り合い関係、層位、出土遺物の推定生産年代などから遺構の時期を推定するとともに、分析の成果を踏まえて当時の状況を考察する。

第1節 甲府城下町遺跡（丸の内3丁目）の遺構について

始めに調査地点における遺構の推定年代を考察する。調査地点北東部の遺物包含層（基本層序Ⅲ層）にて文久永寶が1点出土した。文久永寶は文久3年～明治2年（1863～1869）鋳造である。また、18・19世紀代の肥前系陶磁器、瀬戸・美濃系陶磁器が出土していることからⅢ層は江戸後期～明治期と推定される。そのため、Ⅳ層上面で検出された3基の埋桶の使用時期は近世と考えられる。

図9は『懷寶甲府絵図（第二版）』（1849）より嘉永2年の百石町と調査地点を重ねたものである。本調査地点は「林」「ウシヲク」に囲まれた空地に位置しており、共同利用されたものと推測される。しかし、図10の『懷寶甲府絵図（第三版）』（1872）をみると明治4年の調査地点付近では民用地の表記がなくなる。図11の『甲府市街明細地圖』（1920）は甲府市街の店舗を記載した地図だが、調査地点付近には若尾倉庫があるのみである（第13図は当時の若尾倉庫外観）。このことから本調査地点で検出された埋桶は江戸時代に利用されていたものと考えられる。

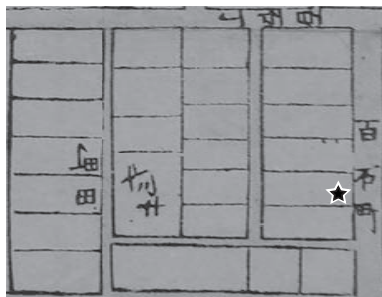
次にそれぞれの遺構について考える。まずSK6で検出された埋桶についてである。他2基と違い内側に倒されるように損壊しており、桶板の直上10cm付近に径10～15cmの石が敷き並べられていることから意図的に壊されたと推測される。また、切り合いの関係はSK1に先行する。SK1、SK2の埋桶は隣接はするが明確な切り合いが確認されず、同時期に埋没した可能性がある。また出土遺物も18世紀～19世紀の陶磁器類のためほぼ同時期の遺構と推測される。

また、埋桶SK1・2より採取した土壌試料の自然科学分析を行った結果、前章にも記載の通り栽培植物の果樹や水田・畑作物の種子・果実や草本植物のほか、動物遺体、昆虫などが確認された。

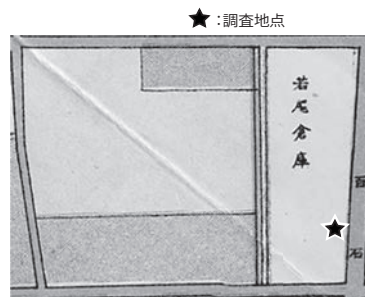
SK1埋桶では生活ゴミに多く集まるオオクロバエが多量に確認されたほか、同じく生活ゴミ・食品類に集ま



第9図 嘉永2年(1849)頃の土地利用
『懷寶甲府絵圖(第二版)』擁萬堂村田屋孝太郎[1849]に加筆
(所蔵:山梨県立博物館)



第10図 明治4年(1872)頃の土地利用
『懷寶甲府絵圖(第三版)』擁萬堂村田屋孝太郎[1872]に加筆
(所蔵:山梨県立博物館)



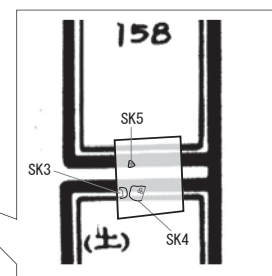
第13図 大正時代の土地利用
『實測甲府市街全圖』渡邊安五郎に加筆
(所蔵:山梨県立博物館)



第11図 大正9年(1920)頃の土地利用
『甲府市街明細地圖』東京交通社(大正9年[1920])に加筆
(所蔵:山梨県立博物館)



第12図 昭和16年(1941)頃の土地利用
『商都甲府市家屋図』大蔵省銀行局保険係(昭和16年[1941])に加筆
(所蔵:甲府市教育委員会)



るイエバエも確認されている。また、動物遺体・魚鱗・貝殻が確認されており、それらの腐敗物に集まるキンバエも1点確認されている。その他、貯穀食性を持つカバイロヒョウホンムシも1点確認されている。それにより埋桶付近に穀物貯蔵施設があることが示唆されたが、本調査地点では明確な貯蔵施設は確認されていないため調査区外も想定する必要がある。

SK2では発酵食品に集まるショウジョウバエ属やヒトの集中居住や地表面汚染の指標種であるマグソコガネ、エンマコガネ属が確認された。また、雑食性のオサムシ科やゴミムシダマシ科が確認されている。これはSK1よりも多種類の果実・種子が確認されているためと推測できる。しかし、埋桶の容量に比べて検出された有機物量が少ない。SK1・2が廃棄桶として使用されていた場合、今回検出された有機物より多量の有機物の検出が予想される。このことからSK1・2の埋桶は水桶・溜桶等として使用され、廃絶後に二次堆積あるいは廃棄桶として二次利用された可能性を考える必要がある。また、SK1・2では竹筒を対の位置に2本ずつ検出した。井戸等の埋立時に竹筒を1本設置し魂抜きを行う事例が見られるが、今回の調査では桶の側板外に2本ずつ設置されていたため、今後類例を待ってから検討を行いたい。なお、埋桶の使用時期については江戸後期とみられるが明治期の磁器も出土していることから、桶の廃絶後の廃棄、あるいは流れ込みもあり得よう。

次に、SK3・SK4・SK5の杭についてである。この3基のうちSK3・4間は1.4mあり高低差は無い。SK4・5間は1.8m、SK3・5間は1.9mあるが、SK5はSK3・SK4よりも35cm高い位置に杭頭が検出されている。遺存したSK3の礎石が最大厚30cmであり、表土掘削の際にも礎石に使用されたと思われる1辺50cm、最大厚約30cmの方形石が複数確認されたため、SK4・5にも同程度の礎石が存在していたと推測できるものの、SK5は高低差からみて同じ建造物ではないと言える。また、SK3は遺構上部を攪乱によって消失しており、SK4も攪乱されていることから、同時期に建物の解体等に当たって壊された可能性がある。以上を踏まえて本調査範囲と重複する建造物を検討してみる。図12の『商都甲府市家屋図』(1941)は第十銀行の倉庫範囲である。南北方向に並ぶ倉庫の最も南にある倉庫と調査地点が重複しており、壁面とみられる直線がSK3・4とSK5の直上にあたる。また、第11図にも見られる若尾倉庫は明治35年に設立され、翌36年に同倉庫内に若尾銀行百石町出張所が設けられている。図13の『実測甲府市街全圖』では、調査地点を含む百石町の一角がすべて若尾倉庫となっており、昭和3年の若尾銀行分割買収後の図12では第十銀行に倉庫が引き継がれている。この際、若尾銀行百石町出張所も第十銀行の支店となっている。

このことから、SK3・4とSK5は若尾銀行、あるいは第十銀行のそれぞれ別の建物に用いられた建物基礎であった可能性が高い。

第2節 甲府城下町遺跡(丸の内三丁目)の砂層について

次に調査地点北壁に見られる砂層について考察する。SK1埋土の上部に見られる暗灰黄色粗粒砂は北壁に見られる粗粒砂層(層序Ⅱb層)と同一であり、洪水によって流入したものとみられる。

この砂層は第1節でも述べた遺物包含層(Ⅲ層)の直上に位置するため、文久3年以降に堆積した層といえる。



第14図 大正9年(1920)の若尾倉庫外観
『甲府市街明細地圖』東京交通社(大正9年[1920])



第15図 明治43年(1910)の被害地域推定
『甲府市制四十周年記念誌』甲府市(昭和3年[1928])記載の被害範囲を『地理院地図Vector』に加筆



第16図 明治43年(1910)の泉町浸水の様子
『山梨県水害史』山梨県水害史発行所(明治44年[1911])

また、図 12 は昭和 16 年（1941）の『商都甲府市家屋図』であり、こちらは調査地点と重なるように第十銀行倉庫の記載がある。調査地点直上に建物範囲があるが埋桶が遺存していることから、砂礫の流入後その上に倉庫を建設したとみられる。前節第 11 図にあるように大正 9 年までは調査地点付近に建造物が無く、第 13 図では倉庫となっているため、第Ⅱ層は文久 3 年～大正 9 年の間に発生した水災害による砂礫の流入であると推測できる。これを踏まえ、調査地点付近で期間内に発生した河川の氾濫や堤防の決壊による浸水・洪水害をまとめる。

慶応 4 年 7 月 19 日

大雨により三ツ水門が決壊、西青沼町から片羽町、及び城屋町に浸水被害をもたらした。

明治 39 年（1906）7 月 12 日～17 日

前線による大雨が五日間続き荒川が増水、三ツ水門付近から決壊し甲府市南部において 2m 以上の浸水被害をもたらした。甲府の総降水量 241.0mm。

明治 43 年（1910）8 月 2 日～17 日

台風、前線の影響により荒川、塩川が大氾濫し甲府市をはじめ盆地の南部一帯で被害甚大となっており、調査地点付近では相川が飯田橋付近で決壊、百石町を含む甲府市西部に浸水被害をもたらした。甲府の総降水量 583.2mm。明治 44 年（1911）『山梨県水害史』より調査地点近辺の当時の様子が見られる。図 15 に示したものは『甲府市制 40 年記念誌』に掲載された被害範囲を現在の甲府市内地図に重ねたものである。図 16 は調査地点付近に位置する泉町の浸水の様子である。

大正 8 年（1919）9 月 10 日～16 日

台風による大雨が数日間にわたり県内一円の被害甚大。堤防決壊 30 箇所にあつた。甲府の総降水量 220.3mm。

第 3 章第 3 図にあるように洪水堆積層（Ⅱ層）は 3 層となっており、そのうち 2 層（Ⅱ b・Ⅱ c 層）は同色粗粒砂の為、近い時期または同じ洪水を起因とする流入砂とみられる。このことから、少なくとも二度の洪水による流入と推測される。このうち明治 43 年の水害は被害範囲が判明しているが、調査範囲が狭小であり周辺遺跡で類例も見られないため今後の発掘調査に期待したい。

参考文献

- 江戸遺跡研究会 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』
甲府市史刊行委員会 1964 『甲府市史 市制施行以後』
甲府市史編さん委員会 1990 『甲府市史 通史編 第三巻 近代』
甲府市史編さん委員会 1990 『甲府市史 史料編 第六巻 近代』
甲府地方気象台百年誌編集委員会 1994 『山梨県の気象百年』甲府地方気象台百年史編集
瀧澤武雄 1999 『貨幣 日本史小百科』東京堂出版
瀧澤武雄 1996 『日本の貨幣の歴史』吉川弘文館
早川文太郎 1911 『山梨県水害史』山梨県水害史発行所
宮川葉子 2017 『楽只堂年録 第 6 史料纂集 古記録編〔第 193 回配本〕』八木書店
山梨県 2005 『山梨県史 通史編 第五巻 近代』山梨日日新聞社
山梨県 1965 『山梨県史 史料編 第八巻 近代』山梨日日新聞社
山梨県警察史編さん委員会 1978 『山梨県警察史 上巻』山梨県警察本部
山梨中央銀行行史編さん室 1981 『創業百年史』山梨中央銀行

報告書

- 甲府市教育委員会 2008 『甲府市内遺跡Ⅴ』甲府市文化財調査報告 38
甲府市教育委員会 2011 『甲府市内遺跡Ⅷ』甲府市文化財調査報告 59
甲府市教育委員会 2021 『甲府城下町遺跡 26』甲府市文化財調査報告 117
甲府市教育委員会 2022 『甲府城下町遺跡 29』甲府市文化財調査報告 126
甲府市教育委員会 2022 『甲府城下町遺跡 30』甲府市文化財調査報告 127
山梨県 2005 『県指定史跡 甲府城跡（下巻）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 222 集
山梨県教育委員会 2007 『甲府城下町遺跡（甲府地方裁判所地点）』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第 249 集



遺構検出状況 西から



完掘状況 西から



遺構検出状況 南から



完掘状況 南から



調査地点全景 (モザイク写真)

図版2 (SK1・2)



SK1 埋桶検出状況 南から



SK2 埋桶検出状況 南から



SK1 埋桶底板検出状況 南から



SK2 埋桶底板検出状況 南から



SK1 掘方完掘状況 南から (掘方際に竹筒)



SK2 掘方完掘状況 南から



SK1 遺物出土状況 南から



SK1 遺物出土状況 南から



SK3 礎石 東から



SK3 木杭検出状況 東から



SK4 木杭検出状況 南から



SK5 木杭検出状況 東から



SK3・4 断割状況 南から



SK4・5 木杭検出状況 東から

図版4 (SK6 他)



SK6 遺物出土状況 (上層) 東から



SK6 土層断面 東から



SK6 遺物出土状況 (下層) 東から



SK6 集石検出状況 東から



SK6 完掘状況 東から



SK6 遺物出土状況 東から



III層遺物出土状況 西から



III層遺物出土状況 西から

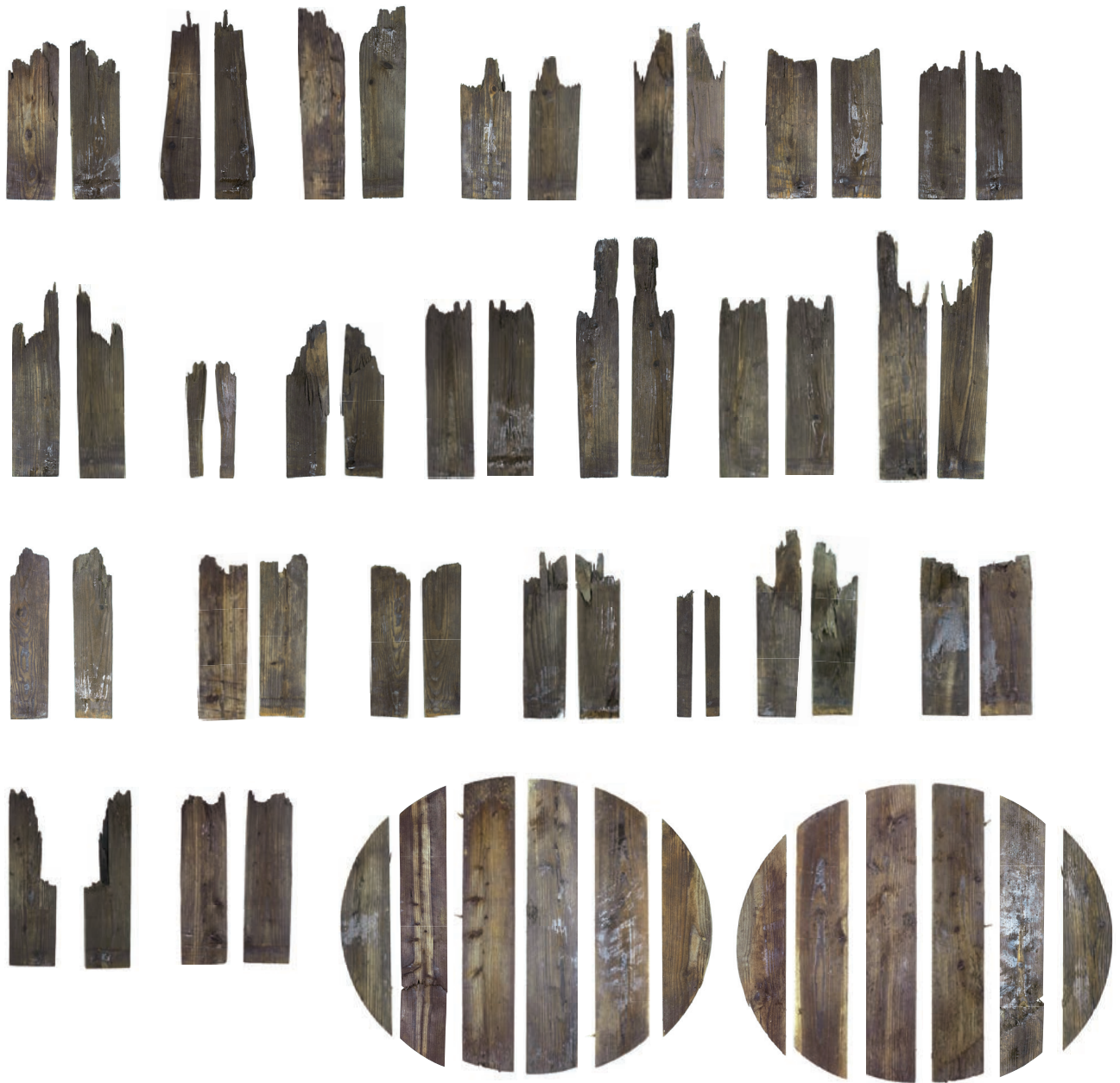


図版6 (桶1)

SK1



SK2



SK6



報告書抄録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき31 (まるのうち3ちょうめ110ちてん)
書名	甲府城下町遺跡31 (丸の内3丁目110地点)
副書名	集合住宅建設事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	128
編著者	藤巻浩太郎・志村憲一・ハンダリ スダルシャン・三谷智広・森 勇一
編集機関	昭和測量株式会社
所在地	〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号 TEL055-235-4448
発行年月日	2022(令和4)年6月30日

ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こうふじょうかまちいせき	やまなしけんこうふしまるのうち3ちょうめ110	19201	253	35°66'11"	138°56'58"	20220203 ~20220218	20㎡	集合住宅建設工事
甲府城下町遺跡	山梨県甲府市丸の内3丁目110							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲府城下町遺跡	城下町	近世 近代	埋桶・建物遺構など	磁器・陶器・木製品・ 金属製品・動物遺体・ 種子など	埋桶3基検出。出土遺物、 検出状況より江戸後期～明治 期に使用・廃絶されたものと みられる。

要約	調査地点は甲府城下町遺跡の西側に位置する丸の内3丁目である。甲府城二の堀郭外の百石町に所在し、武家屋敷地となっていた。調査では埋桶・建物基礎遺構を検出した。埋桶は3基検出しており、そのうち1基は壊された状態となっていた。遺存する2基の桶内の埋土は水洗選別で得られた試料の同定により、栽培果樹・水田・畑作物の種子や動物遺体とそれらを食性とする昆虫が検出された。建物基礎遺構は3基検出され、そのうち1基は礎石が遺存した。
----	--

甲府市文化財調査報告128

甲府城下町遺跡31

(丸の内3丁目110地点)

—集合住宅建設事業に伴う発掘調査報告書—

2022(令和4)年6月30日 発行

編集 昭和測量株式会社

〒400-0032 山梨県甲府市中央3丁目11番27号

TEL 055-235-4448

発行 株式会社タカラレーベン・甲府市教育委員会・昭和測量株式会社

印刷 株式会社内田印刷所